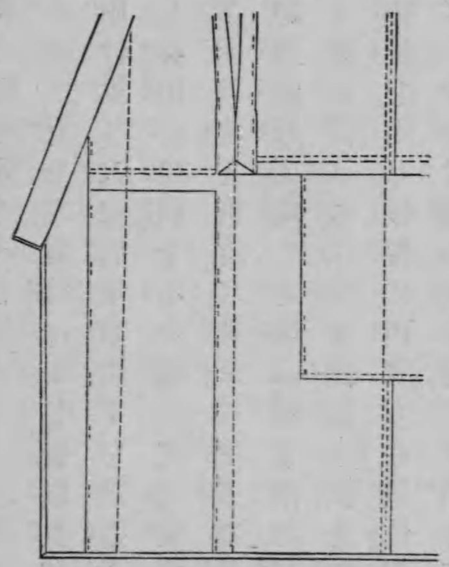


に小さく針目を出して綴ぢ附け、之を開きて平に置き、居敷當布の兩端を身頃に綴ぢ附け（耳なれば耳紵をなし、裁目なれば折りて紵け附け）揚を居敷當布に紵け附け次に左右の脇縫をなし前幅、抱幅及び其中間の寸法を度りて、箆を附け脇の折を附けて、揚の縫込を圖の如く三角に折りて留め、縫込の端を身頃に綴ぢ附け（耳紵）前幅を箆通り折を附け、抱幅より上は衿肩明まで斜に折を附け置くべし。

三 衽附　左右とも衿下を箆より一寸五分程上まで三つ折紵になし、（絹物の時は共通要項に示せる如く、裾先を額縁に縫ひ裾掛と續きに三つ折紵になす）衽附の折を附け、身頃の折と合せて衽附をなし、折を附け前の縫込の端を衽に耳紵にて綴ぢ附け（絹物の時は耳を折りて紵け附ける）次に裾先を斜に折り裾を三つ折紵になすべし。

四 衿附　裏表とも衿肩印の附けある方にて縫代二分位に折を附け表衿の山を脊縫の表に當て待針を刺し、衿肩廻りの處にて身頃の方を淺く、衿のつれぬ樣に待針を刺し、衽下りの箆を劍先に當て待針を刺し、衿丈と衿下との箆を合せて待針を刺し、其間にも待針を刺し、裏衿を身頃の向ふに當て表の待針と一つにして刺し下前より縫ひ始め、劍先にて小さく一針返し縫をなし、衿肩廻しの處にて縫目を細かく縫ひ、上前も同樣になして衿丈の

篦まて縫ひ折を附け、衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ、縫込を裏の方に折りて衿附の縫目に綴ぢ附け、表に返し衿幅の縫込を三角に折りて留め、次に三つ衿に布を入れ、衿幅を裏表一緒に折りて、ねぢれぬ様に待針を刺し、衿先を三分程殘して裏表に針目を小さく十文字に出して確と留め、其絲にて續きに衿紵をなし、一方の衿先も同様になして留め、次に共衿を（共通要項に示す）掛るべし。

五　袖附　袖幅の折を附け、身頃の袖附の處にも折を附け、兩方の折を合せて身頃の山の處にて、折より一分先を摘みて待針を刺し置き、袖附の處を袖にて身頃を挾みて四つ留になし、それより なそへに身頃を折りて、左右とも袖の方を見て附の始め終りを返し縫になし、山の處を一針返して袖を附け、袖の方に折を附け山の處に女物の如く三針耳紵をなすべし。

セル及フランネル類の縫方は女物單衣の處に示しあれば省く。

第二節　本裁男物袷

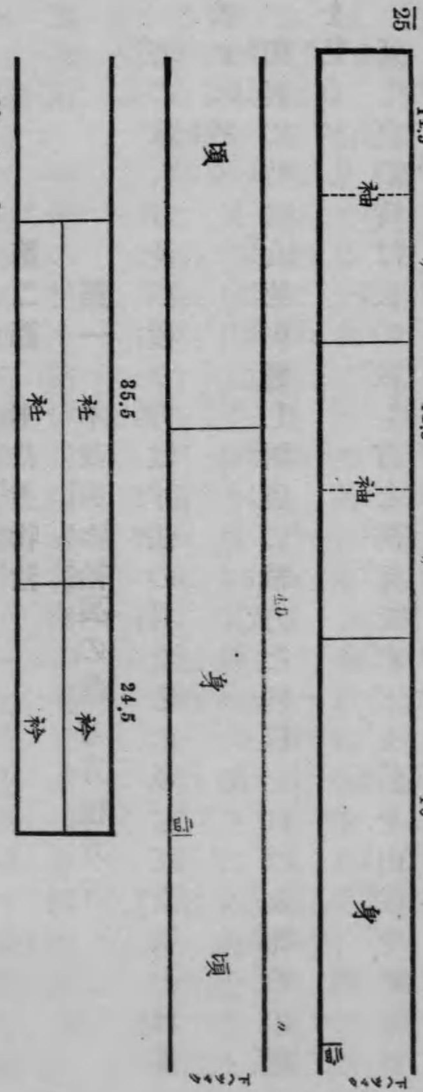
第一　本裁男物袷裏の裁ち方積り方

表の裁ち方及び積り方は寸法の異なるのみにて女物と同様なれば省く

額裏の時は女物裾廻し附裏の裁方と同様なれば女物袷の處を見るべし。

通し裏の時は、表の裁ち方と同様なれども、衿を山接ぎになせば、身丈を長く裁つことを得べし左に其圖を示す。

裏地一反二丈七尺八寸の布にて本裁男物袷裏の裁ち方



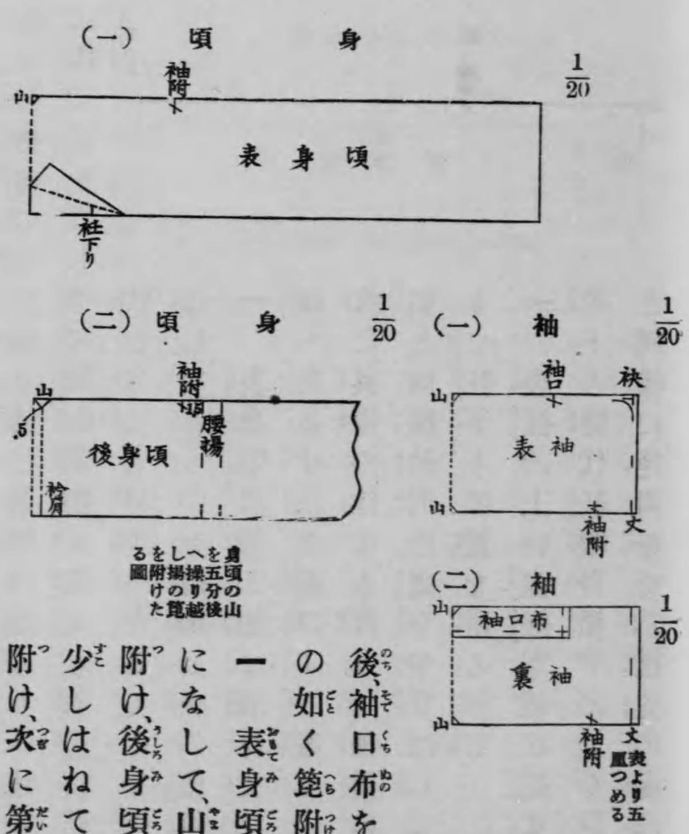
（一六四）

積り方

袖丈 14.5×4＝58　裾尺 278－58－（衿丈の半分 2/4 ＋ 衿の接代 .5）＝195.5　裾下り 195.5＋4.5＝200　200÷5＝40身丈

第二　本裁男物袷箆の附け方及び説明

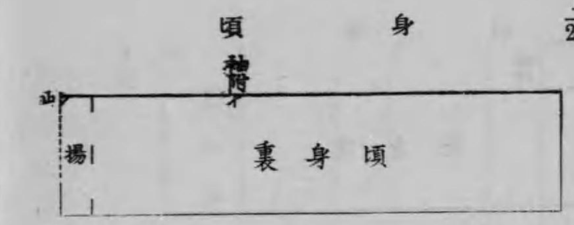
一　表袖は單衣と同様になし、圖の如く山、丈、袖口、袖附、袂の丸み等の箆附をなし、次に裏袖も同様に山丈、袖口、袖附等の箆附をなしたる後、袖口布を其上に載せ圖の如く箆附をなすべし。



身頃の山を五分操り越して揚げの箆を附けたる圖

一　表身頃を單衣と同様になして、山、袖附等の箆を附け、後身頃の衿肩の處を少しはねて、衽下りの箆を附け、次に第二圖の如く山

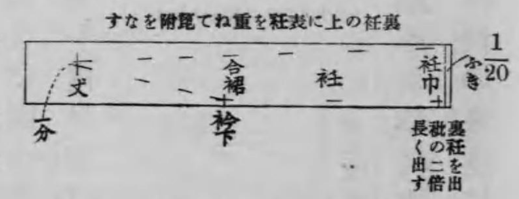
を五分後身の方に繰り越し袖附の箆より一寸五分下りたる處に揚の箆をなし次に揚山(裁切身丈より着丈に裾及び衿肩の縫代として七分加へたるものを引き其殘りを二分したるものを揚山とす)の箆附をなすべし。



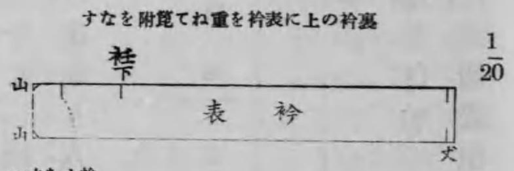
1/20

一　裏身頃は圖の如く、表身丈に出袱の二倍を加へたる寸法を、裾口より度りて揚の箆を附け、次に其揚の箆より斗りて、袖附の箆を附け、表身頃と同様衿肩の處を少しはねて揚の箆より度りて衽下りの箆を附るべし。

一　裏衽の上に表衽を載せ衽丈、裾の縫代、衿下、衿下の縫代、衽幅、合裾等の箆を附け、其他は單衣と同様に箆附をなし、裾先の處にて表をはねて



1/20



1/20

し附と同様なれば女物衿の所を見るべし。

第三　本裁男物衿縫方順序

一　袖左右とも裏袖に袖口を(共通要項に示す)掛け躾を掛け表共通要項に示せる如く裾形を附るべし。

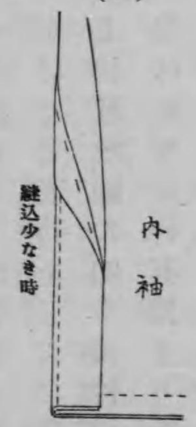
一　裏衿を二つに折り輪の方を左になし、表衿を二つに折りて其上に載せ、圖の如く山、衿肩、衽下り等の箆を附け其箆より衿附と同じ寸法に衿丈の箆を附け一方は丈の箆のみ附け置くべし。

額裏の箆の附け方は女物裾廻

袖と裏袖の山及び袖口の箆を合せて待針を刺し、口先を縫ひ合せ表袖の方に折を附け、次に袖口を(右袖は裏袖を手前に左袖は表袖を手前に見て)四つ留をなし、袖口布の終りまで細かに一針ぬきに四つ縫をなし、續きに袂の角まで縫ひ置き袖幅を度りて箆を附け表は箆通り人形を縫ひ單衣の如く折り裏は箆を五厘縫込みて縫目を割り人形の處にて表裏の丈の箆を合せて袖下を四つ縫になし、表袖の方に折を附け袂の丸みに(共通要項に示す)襞を取りて留め之を表に返し袖

表袖人形縫込の折り方
(一)

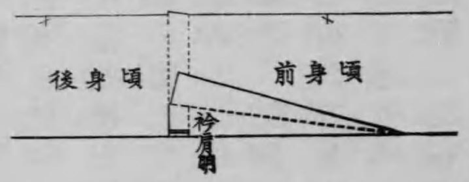
表袖人形縫込の折り方
(二)



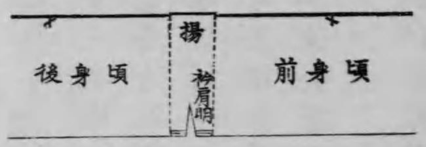
口を毛抜合にして躾を掛け、袖下を四枚一緒に内袖(縫込)のある方を見て躾を掛け、袖附の折を附け置くべし。

二身頃　表身頃の脊縫をなし、後幅及び肩幅の箆を附け脊縫に折を附け、左右とも後幅の箆通り折を附け置き、次に揚を箆通り折を附け、揚山を摘みて脊縫の處に待針を刺し、後幅の折より一分位先まで揚を縫ひ、下の方に折りて躾を掛け、前の揚も箆通り折りて端まで縫ひ、下の方に折りて躾を掛け、左右の脇縫をなし、次に裏身頃の揚を箆通り縫ひ、圖の如く折り躾を掛け、脊縫をな

(一)縫込少なき時



(二)縫込多き時



し後幅及び肩幅の箆を附け、左右の脇縫をなし、脊及脇の折を附け裏表の、脊脇の縫目を合せて待針を刺し裾口を縫ひ合せ、之を表に返し、衩を定めて表裏一緒に躾を掛け、背の縫目を表裏合せて絲の際にて中綴をなし、左右の脇縫を表は單衣の如く、裏は斜に縫込のつれね様に折りて中綴をなすべし。

三 袖附　左右とも表袖を單衣の如く掛け、次に裏袖を四つ留になし、袖の方を折り身頃を開きて袖附をなし、身頃の方に折を附け表に返すべし。

四 衽附　左右の前身頃を表裏平にして、衿肩明の處に待針を刺し置き、前の縫込及び衿肩廻しを躾にて綴ぢ、前幅抱幅及び其中間の寸法を度りて箆を附け、抱幅より上は衿肩明まで斜にして前幅の折を附け置き、次に裙形を小針に縫ひて裾を合せ、表の方に折りて隱躾を掛け、衽附を箆通り折り、身頃を挾みて裾口の縫目を合せて待針を刺し、衽丈の箆と身頃の衽下りの箆とを合せて待針を刺し、其間にも待針を刺して四つ縫になし、表の方に折を附け、次に衿下の折を裏表とも附け、中表になして折を合せ、裙先より衿下の箆まで縫ひ、表の方に折を附け之を表に返し、表裏一緒に躾を掛け、衿附の處を裏表躾にて綴ぢ置くべし。

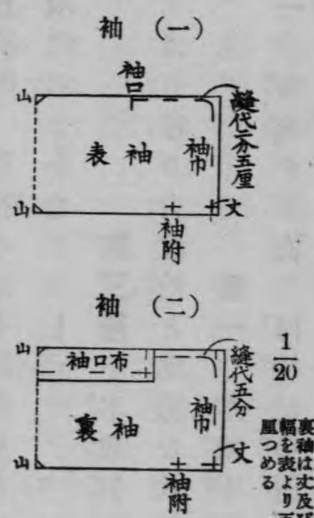
五 衿附　單衣の如く衿附をなし共衿を掛け、次に衩綴ぢ（共通要項に示す）をなすべし。

第三節　本裁男物綿入

裁方積り方は袷と同様なれば其説明を見るべし。

第一　本裁男物綿入箆の附け方及び説明

一 表袖を單衣と同様に箆附をなし、次に裏袖は山丈、袖口、袖附



袖幅袂の丸み等の箆附をなしたる後、袖口布を其上に載せ圖の如く箆附をなすべし。

一　身頃、衽及び衿の箆附は、袷と同様なれば省く。

第二　本裁男物綿入縫方順序

一　袖　左右とも表袖を袖附の箆より袖口まで縫ひ廻し、袂の丸みの襞を（共通要項に示す）取り、人形の縫込を折りて角の處を留め、表に返して躾を掛け置き、次に裏袖に袖口を（共通要項に示す）掛け袖を縫ひ、袖幅を度り袂の丸みの襞を取り、人形の縫込を折りて角の處を留め、表に返し躾を掛け置くべし。

二　身頃　表身頃の脊縫をなし、次に揚、脇縫、衽附、衿附等を單衣と

同様に縫ひ、各折を附け、次に裏身頃の揚を袷の如く縫ひ、表と同様に脊縫、脇縫、衽附、衿附等をなすべし。

三　裾合　左右の裾形を小針に縫ひ置き、表身頃を見て表裏の脊縫及び脇縫、衽附等の縫目を合せて待針を刺し（下前の衽幅の中央より上前の衽幅の中央まで）裾を合せ、次に裏衽を見て裾を縫ひ、表の方に折を附け、之を表に返し裾口に躾を掛け、衽には隱躾を掛け、表の衿下を折りて躾を掛け置くべし。

四　袖附　左右とも裏表の袖幅を箆通り折り、身頃の袖附の處に折を附け、表袖附は單衣の如く身頃を折りて附け、袖の方に折を附け、裏は身頃を開きて袖附をなし、身頃の方に折を附け、叮寧に疊み全體に綿を入れるべし

綿入前の疊み方及び綿の入方は女物綿入の所にあり。

第三　本裁男物綿入紵け方順序

一　裾の出袵を定めて、綿を能く含めて躾にて假に綴ぢ置き、次に衽を衿先より二三寸上まで中綴ぢをなすべし。

二　表裏の三つ衿の處にて脊縫を合せて待針を刺し、衿を引き合せ・袖口に綿を含ませ(共通要項に示す)四つ留をなし。袖口を紵け其絲にて續きに袖下の縫込を裏表綴ぢるべし。

三　裏の衿下に綿を含ませ、表と一緒に躾にて綴ぢ其處を紵け、次に衿附を裏表合せて待針を刺し、縫目の際にて綴ぢ、衿幅を定めて折を附け衿先を四つ留になし、一分五厘程先を縫ひ縫込を裏の方に綴ぢ附け表に返し、三つ衿に綿或は布を入れ、縫込の薄き處には綿を入れ之を平になして、單衣の如く折りて衿紵をなし、共衿を掛け次に布綴ぢ及び袵綴ぢをなすべし。

第四　本裁男物口綿入箆附及び縫方

箆の附け方は綿入と同様なり

本裁男物口綿入縫方順序

一　袖　左右とも表袖を袖口明の箆より二寸位縫ひ、袖口に躾を掛け置き、次に裏袖に袖口を掛け、袖口明の箆より二寸位綿入の如くに縫ひ、夫より下は表袖と(一方は表袖を手前に他の一方は裏袖を手前に見て)合せて、袷に做ひて四つ縫になし、袂の丸みの襞を取り、之を表に返し躾を掛け、袖口に綿を含ませ、袖口を紵け置くべし。

二　身頃　裏表とも脊縫、脇縫、衽附等をなし、裾を合せ袵綿を作り之を裾に入れ、袵を定めて表より躾にて假綴ぢをなし、其他の縫方は總て袷の如くなすべし。

第十一章　四つ身

第一節　四つ身單衣

四つ身裁は着用時期永ければ、隨つて寸法の範圍廣く示しあれば、其年齢及び丈の高低に應じ適宜に加減すべし。

第一　普通仕立上り寸法

一　長袖　一尺七八寸位
　　袖丈　筒袖　六寸より六寸五分位
　　元祿袖　七寸より一尺位まで
　　長袖　四五寸
一　袖口　筒袖　三寸五分より四寸五分位迄
　　元祿袖　四五寸
一　袖附　長袖　四五寸
　　元祿袖　四五寸（筒袖は袖丈と同寸）
一　袖幅　六寸五分より八寸位まで
一　後幅　五寸五分より七寸位まで
一　前幅　衿肩明より眞直
一　身八つ口　二寸より二寸五分位まで
一　衽幅　一ばい
一　衽下り　三寸五分より四寸五分まで
一　衿下　七寸位より一尺二三寸位まで
一　衿幅　一寸より一寸二三分まで

衿下は凡年數位の寸法を適當とす。例へば七歳兒は七寸になすが如し。

第二　並幅物にて四つ身筒袖の裁ち方積り方及び切り離し方

並幅半反（一丈四尺）の布にて四つ身筒袖の裁ち方

積り方
袖丈 7×4＝28
總丈 140－28＝112
112÷4＝28身丈

此裁方を元祿袖に用ひてもよし

切り離し方

總尺の内より二尺八寸を切り離し、丈を二つに切りて兩袖となし、殘りの布を二つに折り之を又二つに折り、輪の方にて三寸八分を切り込み、之を開きて後身の（輪の方）端より幅二寸を裁ち落して、衿及び共衿となすべし。

第三　大幅物にて四つ身長袖裁の裁ち方積り方及び切り離し方

大幅物一丈にて四つ身長袖の裁方

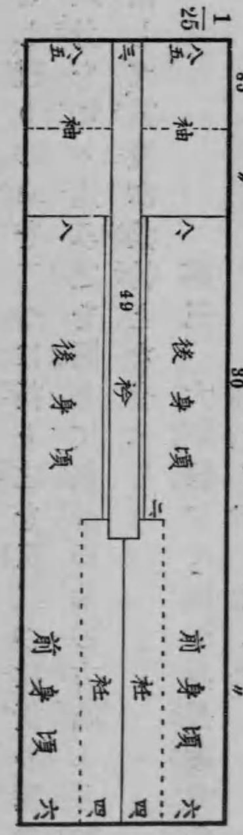
積り方
袖丈 身丈
18＋32＝50
50×2＝100歩尺

共衿丈 五尺三寸
衿丈 一尺五寸

切り離し方

布を縦二つに折り輪の方より幅八寸五分長さ三尺六寸を裁り離して兩袖となし、殘りの布を其儘横に二つに折り、輪の方より四寸切り込み、後身幅八寸に切り離し、衽の輪の處を切り離し、次に衿丈を五尺三寸に裁ち落し、殘りを共衿となすべし。

第四　大幅物にて四つ身元祿袖の裁ち方積り方及び切り離し方



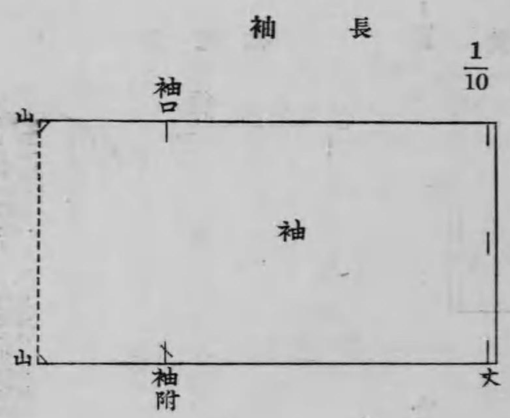
積り方

袖丈 8.5＋身丈 30＝38.5

38.5×2＝77 尺

切り離し方

布を縦に二つ折になし、耳の方より幅八寸五分長一尺七寸を切り離して兩袖となし、殘りの布より衿を四尺九寸續きに裁ち落し、身頃の布を横に二つに折り、衿肩を二寸五分切り込み後身にて五分裁ち落し、衽の輪の處を切り離すべし。



第五　四つ身單衣箆の附け方及び説明（長袖）

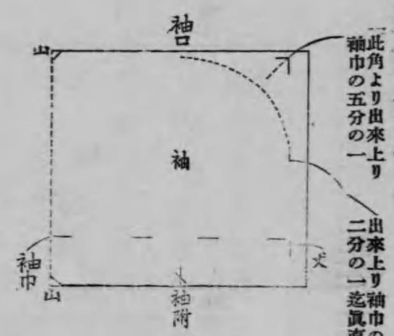
一　袖を二枚合せ丈を二つに折り、輪の方を自分の左になして、圖の如

く山、丈、袖口、袖附等の箆附をなすべし。

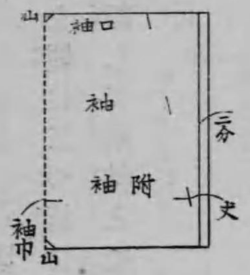
（元祿袖）

一　袖を二枚合せ丈を二つに折り、輪の方を自分の左になして、圖の如く山、丈、袖口、袖幅、袖附、袂の丸み等の箆附をなすべし。

元祿袖　1/10



筒袖　1/10

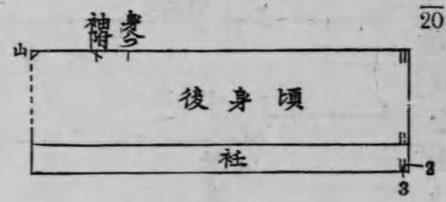


（筒袖）

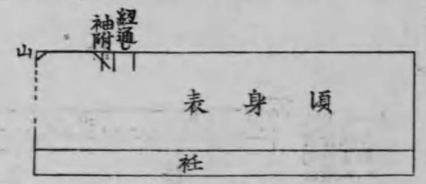
一　袖を二枚合せ、一方を二分長くして丈を二つに折り、輪の方を自分の左になして、山、袖口、袖幅等の箆を附け、次に袖丈

の箆を袖幅の箆の處にて度り袖下の箆を附るべし。

身頃（袖長及び祿元）　1/20



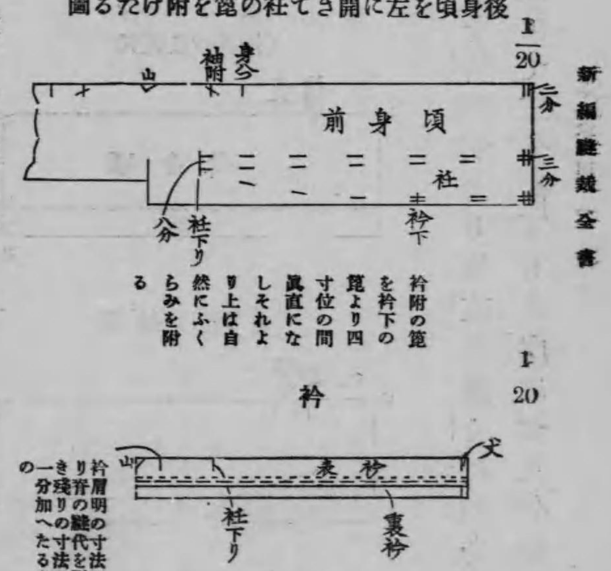
筒袖の身頃　1/20



筒袖の袖附を全部附る場合には袖附の箆を附け其箆より一寸位下りたる處に二寸位の組通し明の箆を附るべし

一　身頃を二枚合せ衿肩明を自分の左の手前になし後身頃を上にして山、丈、袖附身八つ口等の箆を附け、後身頃を左に開きて、袂下りの箆を附け、前幅を衿肩明より眞直に處々に箆を附け、其箆より袂附の箆を、裾口にて三分、袂下りの處にて八分離して箆を附け、其間に圖の如

後身頃を左に開き衽の箆を附けたる圖



へ返し隱躾を掛け、二つに折り輪の方を左になし、圖の如く山、衿肩、衽下り等の箆を附け、其箆より衿附と同じ寸法に衿丈の箆を接ぎ合せ、折を裏衿の方く處々に箆を附け、次に衿下及び衿下の紐代の箆を附け、衿附の箆を衿下の箆より四寸位上まで眞直になし、それより上は自然に、ふくらして箆附をなし、衿附の寸法(劍先より衿下まで)を度り置くべし。

一　表衿の耳の方に裏衿

附け、一方は丈の箆のみ附け置くべし。

一　肩當は別布にて一尺三寸位を横に二つに折り、之を縦二つに折り、輪の方にて衿肩を表身頃の出來上り寸法丈切り込み、前の輪の處を切り離すべし。

第六　四つ身單衣縫方順序

一　長袖　左右とも外表にして縫代を一分位になし、袖附の方にて一寸五分位、袖口の方にて五分位殘して縫ひ、之を裏に返し箆を合せて待針を刺し、袖附の方より縫ひ始め、袂の角にて一針返し、續きに袖口箆まで縫ひ、袖下の折を袖附を右にして自分の手前に折を附け、他の一枚を向ふに折を附け、次に袖口下の折を附け袂の角にて縫込を綴ぢ附け、袖口を三つ折紐になし、袖幅の箆

を附け之を表に返し置くべし。

一元祿袖　左右とも外表にして縫代を一分位になし、袖附の方にて一寸五分、袖口の方にて二寸位殘して縫ひ、之を裏に返し箆を合せて待針を刺し、袖附の方より縫ひ始め、丸みの處は小針に縫ひ、伸さぬ樣に絲こきをなし、袖附を右にして自分の手前に折を附け、他の一枚を向に折を附け共通要項に示せる如くなして、丸みの襞を取りて綴ぢ附け、次に袖口を三つ折紵になし、表を返し置くべし。

一筒袖　左右とも中表にして丈の箆を合せて待針を刺し、袖口及び袖幅の縫込を殘して袖下を縫ひ、丈の短き方に折を附け、長き分を折りて表に小針に出して紵け附け、袖口を三つ折紵になし、之を表に返し置くべし。

二身頃　脊を囊縫になし、後幅及び肩幅の箆を附け、脊縫の折を附け衿肩明を右になし、其向ふ側に肩當布を開きて當て、脊縫と肩當布の中央を合せて、肩當布の表へ小さく針目を出して身頃の方より綴ぢ付け、次に衿肩廻し、及び前身、袖付の處を躾にて綴ぢ附け置くべし。

三衽　左右とも衿下を箆より一寸位上まで三つ折紵になし、前幅及び衽を箆通り折を附け、折を合せて衽附をなし折を附け、次に後幅を箆通り折りて左右の脇縫をなし（筒袖を全部附る場合には、左の脇縫即ち上前を袖附の箆より一寸程縫ひ、其下に紐通し二寸程を明け置くべし、）折を附け裙先を（共通要項に示す）斜に折り、裾を三つ折紵になすべし。

四衿附　衿肩印の附ある方にて、縫代二分位に折を附け、山を脊

縫に當てゝ待針を刺し、衿肩廻りの處にて身頃の方を淺く、衿のつれぬ樣に待針を刺し、衽下りの箆を劍先に當てゝ待針を刺し、衿丈と衿下との箆を合せて待針を刺し、其間にも待針を刺し、下前より縫ひ始め、劍先にて小さく一針返縫をなし、衿肩廻りの處にて、縫目を細かく縫ひ、上前も同樣になして衿丈の箆まで縫ひ、折を附け衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ表に返し、次に（共通要項に示せる如く）なして、三つ衿に布を綴ぢ附け、衿のねぢれぬ樣に衿肩の中央及び其間に待針を刺し、衿紒をなし共衿（共通要項に示す）を掛るべし。

五　袖附　袖幅の折を附け、身頃の袖附の處にも折を附け、兩方の折を合せて山及袖附の箆の處に待針を刺して、左右の袖を附け折を附け、身八つ口及振りを耳紒になし、山の處を三分位の針目にて山に一針、前後に一針づゝ三針耳紒をなすべし。

筒袖を全部附ける場合には袖附を四つ留になして袖を附け紐通しの處を耳紒になすべし。

六　揚及附紐　共通要項に示せる如くなして肩揚、腰揚、及び附紐を附るべし。

第二節　四つ身袷

表の裁方は單衣の處に各種記載しあれば省く。

四つ身袷裏の裁ち方

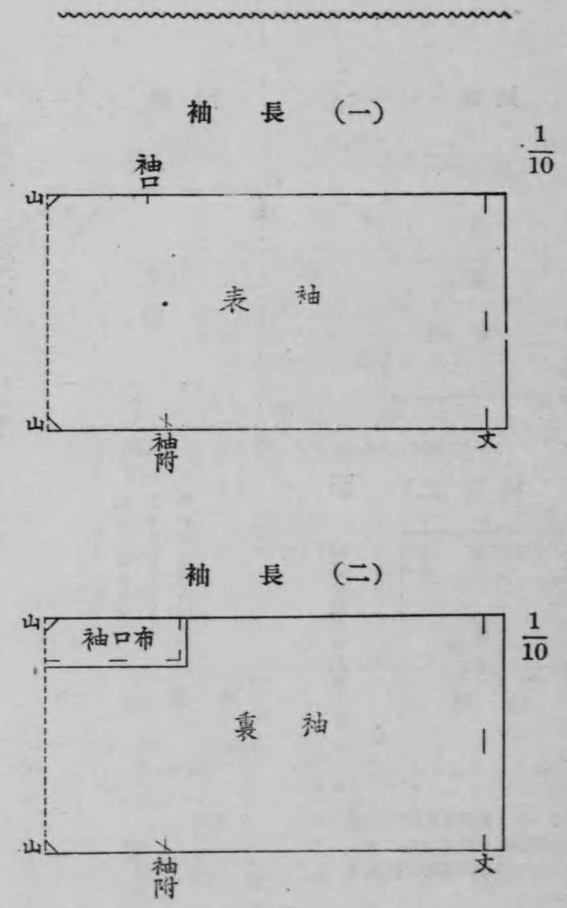
通し裏の時は表の裁方と同樣にして、身丈を袖の出の二倍丈表より長くなすべし。

第一　四つ身裾廻し附裏の裁ち方（裾廻し、胴裏）

金巾或は新モスにて胴裏の裁ち方

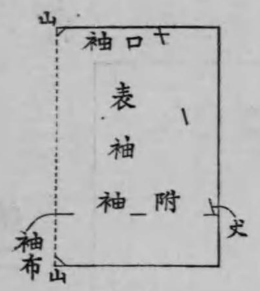
袖丈は表と同寸胴裏の丈は表の丈より裾廻しの丈を引き殘りの寸法に出袱の二倍と胴接ぎの縫込(二寸位)を加へたるものとす。

第二　四つ身袷通し裏箆の附け方及説明

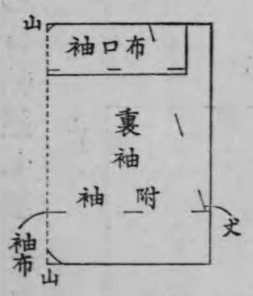


一　表袖は單衣と同様に箆附をなし、裏袖は山、丈、袖口、袖附等の箆附をなしたる後袖口布を其上に載せ圖の如く箆附をなすべし。

袖筒（一）　$\frac{1}{10}$

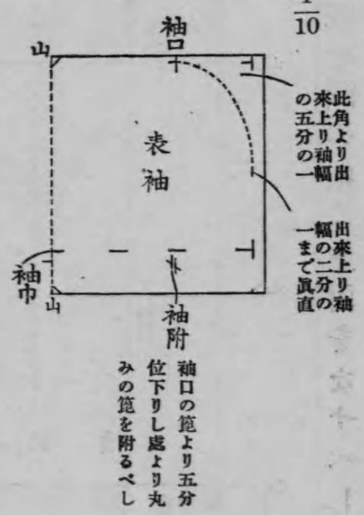


袖筒（二）　$\frac{1}{10}$

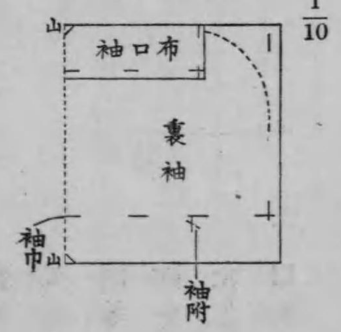


袖口は表より五厘つめなく廣くなる袖の幅は表袖幅より一分一厘裏袖幅と同樣にすべしなにすべし但し元祿袖は袖附より下りは袖附袖は表袖幅と同樣にすべし

袖祿元（一）　$\frac{1}{10}$

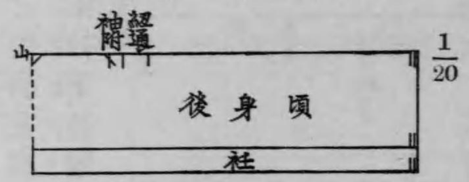


袖祿元（二）　$\frac{1}{10}$



一　表袖は單衣と同樣に箆附をなし、裏袖は山丈、袖口、袖附、

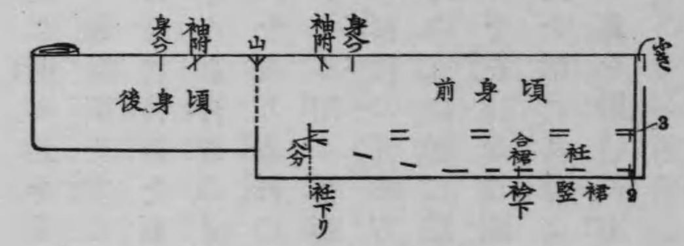
（一）　頃身



長倍二の裁出を丈は頃身裏身表は他其てにみのすなく く者を圖ばれな樣同と頃

（二）　頃身　$\frac{1}{20}$

圖るたけ附を箆の衽てき開に左を頃身後

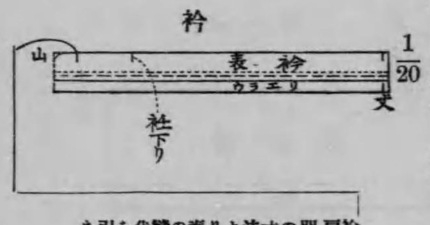


寸四りよ箆の下衿を箆の附衿りよれそしなに直眞を間の位る附をみらくふに然自は上

袖幅等の箆附をなしたる後、袖口布を其上に載せ圖の如く箆附をなすべし。

一　表身頃を二枚合せ衿肩明を自分の左の手前になし、後身頃を上にして、山、袖附、身八つ口等の箆を附け（筒袖は身

八つ口の篦を附けず、紐通し明の篦を單衣の如く附る)裏身頃も同様になして篦附をなし、後身頃を左に開きて其上に表身頃を載せ、衿肩及び山を能く合せて待針を刺し、圖の如く衽下り、前幅、衽附、衿下、衿附等の篦附をなし衿附の寸法を劍先より衿下までの間を度り、表衽の裾先をはねて、共通要項に示せる如く裾形を附るべし。

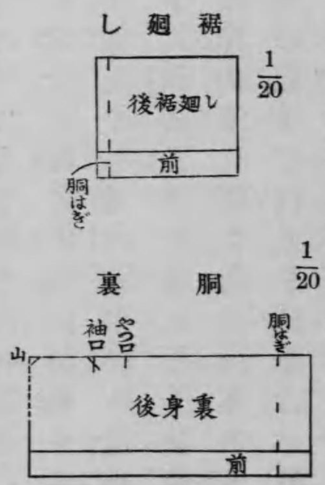


衿肩明の寸法に一加分へたるものを表衿の寸法とす

一　表衿の耳の方に裏衿を接ぎ合せ、折を裏衿の方に返し隱躾を掛け、二つに折り輪の方を左になし、圖の如く山、衿肩、衽下り等の篦を附け、其篦より衿附と同じ寸法に衿丈の篦を附け、一方は丈の篦のみ附け置くべし。

第三　四つ身衿裾廻し附篦の附け方及説明

袖及び表身頃、衿は通し裏の時と同様なれば省く。



表身丈より裾廻しの丈を引き殘りの寸法に出袱の二倍を加へたるものを胴裏の丈とす

一　裾廻しの前布の上に後布を重ねて、裾口を右にして丈を度り胴接ぎの篦をなすべし。

一　胴裏を二枚合せ、衿肩明を自分の左の手前になし、後身頃を上にして山篦をなし、丈を度りて胴接ぎの篦をなし、次に表身頃と同様に、袖附、身八つ口等の篦附をなすべし。

一　後前の胴接ぎをなし、胴裏の方に返して躾を掛け、再び裁板の上に載せ、其上に表身頃を載せ、衿肩及び山を能く合せて待針

を刺し、通し裏の時と同様に箆附をなすべし。

第四　四つ身袷縫方順序

一長袖　左右とも裏袖に袖口を、共通要項に示せる如くなして掛け、躾を掛け表袖と裏袖の山を合せて待針を刺し、袖口の箆を合せて口先を縫ひ合せ、表袖の方に折を附け、次に袖口を基礎縫に示せる如く(右袖は裏袖を手前に、左袖は表袖を手前に見て)四つ留をなし、袖口布の終り迄細かに一針ぬきに四つ縫をなし、續きに袂の角まで縫ひ置き、袖幅を度りて箆を附け、表は箆通り、裏は箆の下に折を附け、内側の表袖と裏袖とを布の表を合せて、袖附の箆まで振りを縫ひ合せ、外側も同様になし、袖附の箆まで振りを縫ひ合せ、次に袖下を振りの方より四つ縫になし、(振りの縫込は裏袖の方に折りて綴ぢ附る)表の方に折を附け、次に袖口下

の縫込を同じく表の方に折りて、袂の角にて縫込を綴ぢ附け、是を表に返し振りを裏表一緒に躾を掛け、袖口を五厘程表にふかせて躾を掛け、袖下は四枚一緒に、内袖(縫込のある方)を見て躾を掛け、袖附の折を附け置くべし。

一元祿袖　左右とも裏袖に袖口を掛け、(共通要項に示す)躾を掛け表袖と裏袖の山を合せ待針を刺し、袖口の箆を合せて口先を縫ひ合せ、表袖の方に折を附け、振りの處を表は箆通り、裏は箆の下に折を附け、折を合せて兩方の振を縫ひ、表の方に折を附け、次に袖口を(右袖は裏袖を手前に、左袖は表袖を手前に見て)四つ留になし、袖口布の終りまで細かに一針貫に四つ縫になし、次に一方の振りを中に入れ、振りの縫込を裏の方に折りて待針を刺し、振りの方より袖下を箆通り四つ縫になし、丸みの處を小針に縫

ひ、伸さぬ様に絲こきをなし、表の方に折を附け、共通要項に示せる如くなして丸みの鬢を取りて綴ぢ附け、之を表に返し振を裏表一緒に躾を掛け、袖口を五厘程表にふかせて躾を掛け、袖下は四枚一緒に躾を掛け、袖附の折を箆通り附け置くべし。

一筒袖　左右とも裏袖に袖口を掛け躾を掛け、表袖と裏袖の山を合せて待針を刺し、袖口の箆を合せて口先を縫ひ合せ、表袖の方に折を附け、袖口の縫目を合せて待針を刺し、裏袖を五厘程表にふかせ、右袖は袖附の方を右に持ち表袖を見て、左袖は裏袖を見て、袖附の方にて袖幅の箆より、袖幅の縫込丈殘して袖下を四つ縫になし、其處にて一針返し裏袖を離して、表袖のみ袖幅の箆まで縫ひ、次に裏袖の縫ひ殘したる處を袖幅の箆まで縫ひ、表袖の方に折を附け、之を表に返し袖口に裏表とも一緒に躾を掛け、

次に袖下にも躾を掛け、袖附の折を箆通り附け置くべし。

若し振りを明ける場合には、袖口先を縫合せたる後、振りの處を表は箆通り、裏は箆の下に折を附け、折を合せて兩方の振を縫ひ、表袖の方に折を附け、一方の振りを中に入れ表を合せ、振りの縫込を裏に折りて待針を刺し、次に袖口の縫目を合せて待針を刺し、裏袖を五厘程表にふかせ、それより縫ひ終りまで長袖及び元祿袖に做ふべし。

二長袖及び元祿袖の身頃　表身頃の脊縫をなし、後幅及び肩幅の箆を附け置き、次に左右とも前幅及び衽を箆通り折を附け、折を合せて衽附をなし折を附け、次に後幅を箆通り折りて左右の脇縫をなし、折を附け裏身頃も同樣になし、次に表身頃を見て裏表の脊脇及び衽の縫目を合せて待針を刺し、下前の衽幅の中央

より、上前の衽幅の中央まで裾口を縫ひ合せ、次に裏衽を見て共通要項に示せる如く裾を縫ひ、表の方に折を附け、衽に隠躾を掛け、之を表に返し襠を定めて表裏一緒に躾を掛け、脊の縫目を表裏合せて絲の際にて中綴をなし、次に身八つ口の處のつれぬ様に、後身の縫込を斜に折りて、左右の脇の中綴をなし、身八つ口を四つ留になし、後及前の身八つ口を袖附の箆まで縫ひ、表より躾をかけ置くべし。

二 筒袖の身頃　袖附を全部附ける場合には左の脇縫を袖附より一寸程縫ひ、其下に紐通し二寸程を明けて脇縫をなし、其他は長袖及び元祿袖の身頃に倣ひて、脇縫の中綴ぢ迄なし、次に紐通しの處を上下四つ留になし、中より後前とも縫ひて、表より躾を掛け置くべし。

振りを明ける場合には、長袖及元祿袖の身頃と同様になすべし。

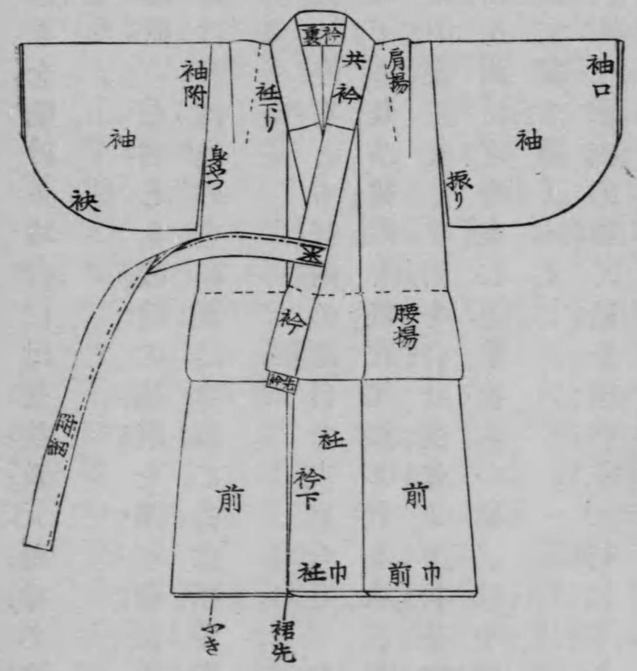
三 袖附　左右とも後前の袖附を四つ留になして、裏表別々に袖を附け、表は袖の方に、裏は身頃の方に折を附け、表に返し置くべし。

四 衽　左右とも衽附の縫目を表裏合せて、絲の際にて中綴をなし、衽下り及び、衿肩を躾にて綴ぢ置き、次に衿下の折を裏表とも附け、中表になして折を合せ、裾先より衿下の箆まで縫ひ、表の方に折を附け、之を表に返し裏表一緒に躾を掛け、衿附の處を裏表躾にて綴ぢ置くべし。

五 衿附　單衣の如く衿を附け、三つ衿に布を入れ(共通要項に示す)衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ衿紵をなし、共衿を共通要

第三節　四つ身綿入

四つ身元祿袖綿入仕立上り圖及各部の名稱



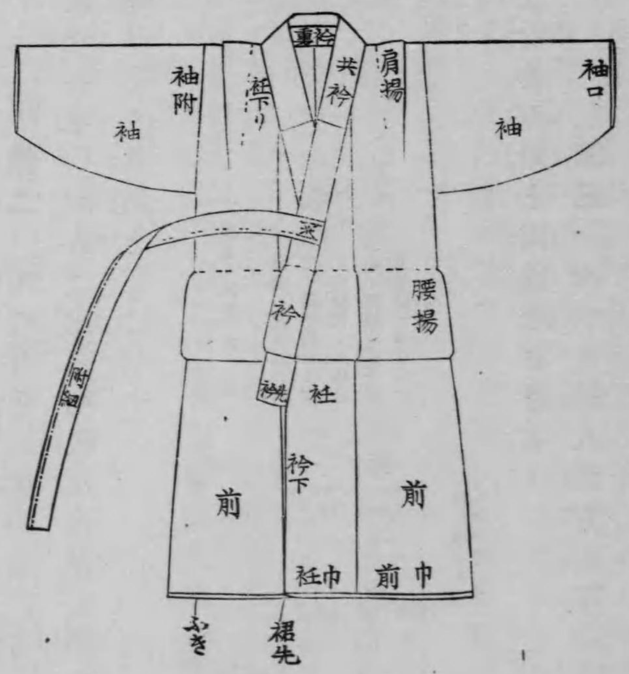
項に示せる如くなして掛け、次に袵綴ぢをなすべし。

六　揚及び附紐

共通要項に示せる如くなして肩揚腰揚及び附紐を附るべし。

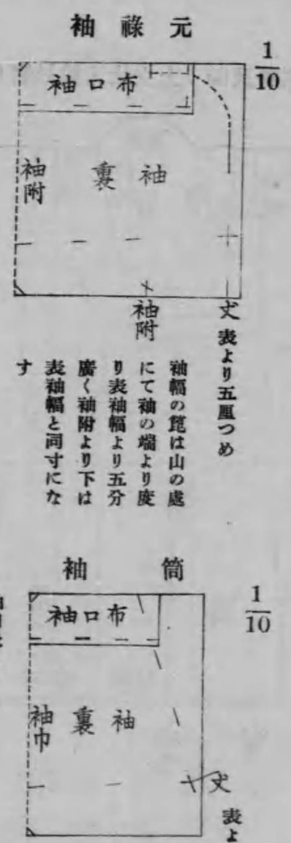
第一　四つ身筒袖綿入仕立上りの圖及び各部の名稱

四つ身筒袖綿入仕立上り圖及各部名稱



第二　四つ身綿入箆の附け方

裁方積り方箆の附方は袷と同様なれども、袖口に襁を出す處に聊か違ひあり、其點を左に示す。



長袖は女物箆附と同様なれば省く。

第三　四つ身綿入縫方順序

一長袖　表袖を振りの方より縫ひ始め、袖口の箆まで縫ひ、袖幅を度りて箆を附け、表に返し袖口及び袖下に躾を掛け置き、次に裏袖に袖口を共通要項に示せる如くなして掛け、裏袖を縫ひ、袖幅を度り（袖幅の箆は山の處に袖の端より度り、表袖幅より五分廣く袖附より、下は表袖幅より五厘狹く）箆を附け、之を表に返し躾を掛け置くべし。

一元祿袖　左右とも表袖を縫ひ、丸みの處を小針に縫ひ、伸さぬ様に絲こきをなし、共通要項に示せる如くなして丸みの襞を取り、是を表に返し、袖口の廻りを折りて續きに躾を掛け、次に裏袖に袖口を掛け（共通要項にあり）袖を縫ひ丸みの襞を取り、表に返し躾を掛け置くべし。

一筒袖　左右とも表袖を縫ひ折を附け之を表に返し、袖口の廻りを折り袖下を續きに躾を掛け、次に裏袖に袖口を掛け躾を掛

け、袖下を縫ひて折を附け、表に返し躾を掛け置くべし。

二　身頃　表身頃を袷と同様に脊縫、衽附、脇縫等をなし、衿附を單衣の如くなし、次に裏身頃も同様になすべし。

三　裾合　左右の裾形を小針に縫ひ置き、表身頃を見て、表裏の脊縫及び脇縫、衽附等の、縫目を合せ待針を刺し、下前の衽幅の中央より、上前の衽幅の中央まで裾を合せ、次に裏衽を見て裾を縫ひ、(共通要項に示す)表の方に折を附け、之を表に返し、裾口に躾を掛け、衽には隱躾を掛け、表の衿下を折りて躾を掛け置くべし。

四　袖附　裏表の袖幅を篦通り折り、身頃の袖附の處に折を附け、兩方の山を合せて袖附をなし、表は袖の方に折り、裏は身頃の方に折を附け、表袖の振及身八つ口を折りて躾を掛け、次に裏袖の振及び身八つ口に綿を含ませ、本裁女物綿入の處に示せる如く

なして、全體に綿を入るべし。

第四　四つ身綿入紬方順序

一　裾の出褄を定めて、綿を能く含めて躾にて假に綴ぢ置き、次に衽を衿先より二三寸上まで中綴をなすべし。

二　表裏の三つ衿の處にて、脊縫を合せて待針を刺し、衿を引き合せ置き、袖口に綿を含ませ四つ留になし(筒袖は袖下の縫目より)袖口を紬け、其絲にて續きに袖口下の縫込を裏表綴ぢ、次に前後の袖附及び身やつ口を四つ留になし、袖下の縫目より身やつ口を續きに振りを紬け其絲にて袖下の縫目を裏表綴ぢるべし。

三　裏の衿下に綿を含ませ、衿下の篦を合せて表と一緒に躾にて綴ぢ其處を紬け、次に脊の縫目及び衽先を、裏表合せて待針を刺し、衿附の縫目の際にて綴ぢ、三つ衿に布を(共通要項に示す)入

れ、衿巾を定めて、折を附け衿先を縫ひ、衿絎をなし共衿を掛け（共通要項に示す）脊縫及び左右の脇縫に布綴ぢをなし、次に袵綴ぢをなすべし。

肩揚及び腰揚をなし附紐を附るべし（共通要項に示す）

第十二章　三つ身

第一節　三つ身單衣

第一　普通仕立上り寸法

一　袖丈
　長袖　一尺四五寸
　筒袖　六寸位

一　袖口
　長袖　三寸より三寸五分位迄
　元祿袖　六寸五分位
　筒袖　三寸より三寸五分位迄
　元祿袖　三寸より三寸五分位迄
　筒袖　四寸位

一　袖附
　長袖　四寸位

一　袖幅　元祿袖　四寸位

一　後幅　六寸より六寸五分位迄

一　前幅　一ばい

一　身八つ口　一ばい

一　衽幅　二寸位

一　合裾　一ばい

一　衽下り　衽幅より二分引

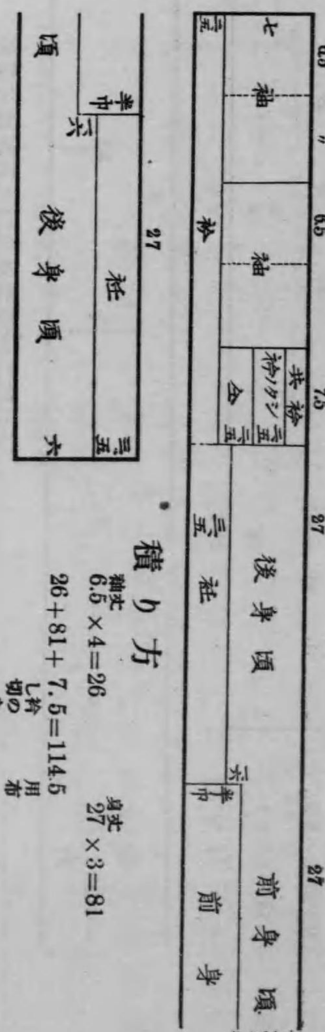
一　衿下　三寸

一　衿幅　六寸位

一　衿　一寸位

第二　並幅兩面物にて三つ身筒袖裁の裁ち方

積り方及び切り離し方



積り方

袖丈 6.5 × 4 = 26　　身丈 27 × 3 = 81

26 + 81 + 7.5 = 114.5 用布

衿のし切り

切り離し方

一丈一尺四寸五分の中より幅七寸長さ三尺三寸五分を切り離し一方の端より幅二寸五分を裁ち落して衿となし、次に袖布の端より長さ七寸五分を切り離し衿のたし切及び共衿を寸法通り切り離し、袖布を丈二つに切り離し、次に殘りの布を三分し

て布幅の半分迄切り込み、一方は反對の側にて同じく布の半分迄切り込み、前身頃を半幅に切り離し、後幅六寸になして衽を切り離し、他の一方も同様になすべし。

第三　並幅片面物にて三つ身前接裁の裁ち方

積り方及び切り離し方

積り方
袖丈
14.5×4=58
身丈
26.5×3=79.5
前の接ぎ代
58+79.5+ .5=138用布

第四　一丈三尺八寸の中より、五尺八寸を切り離し其端より幅二寸五分切り離し、之を衿となし残布を二つに折り、後の端より二尺六寸五分の處を半幅まで切り込み、前身を半幅に裁ち落し、輪の處を切り離し、後幅を六寸に度り衽を切り離すべし。

友染メリンス半幅にて三つ身元祿袖裁ち方の裁ち方積り方及び切り離し方

積り方
袖丈
7×4=28
身丈
28×3=84
28+84=112用布

切り離し方

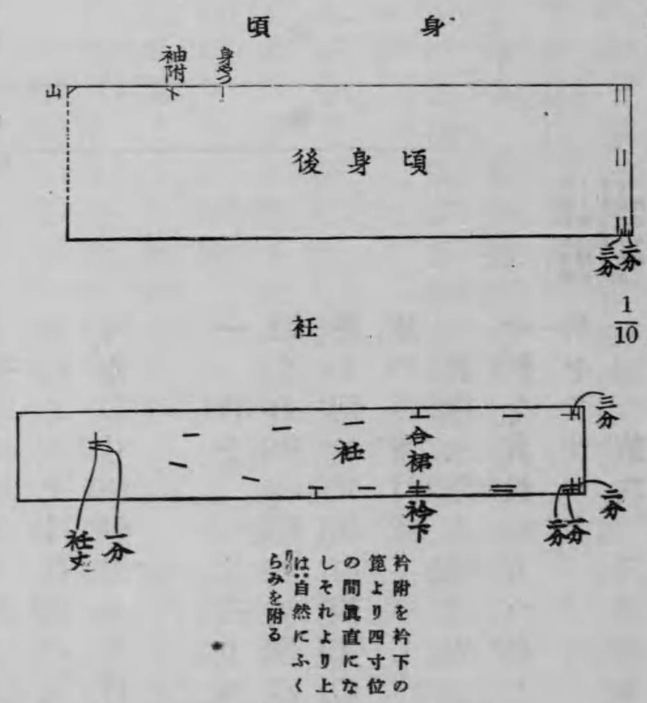
一丈一尺二寸の中より幅八寸三分、長さ二尺八寸を切り離して兩袖となし、衿布の丈を五尺六寸に切り離し、衽を四寸一分切り、次に圖の如く前身を幅四寸二分、長さ二尺八寸のところまで切りて後身を切り離し、殘りの布より衽の四寸二分を切り離すべし。

第五　三つ身單衣筒の附方及説明

筒袖長袖、元祿袖の筒附は何れも四つ身單衣筒附の處に説明したれば此處にては省く。

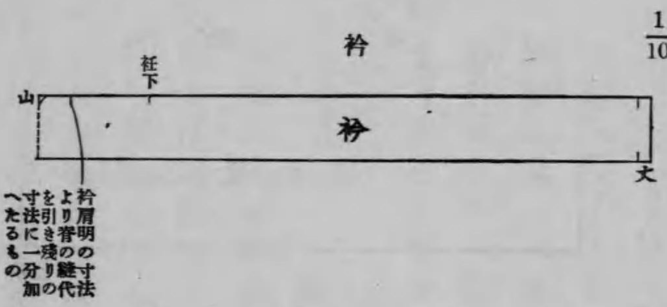
但し筒袖にても袖附の筒をなして振りを明る。

一　表身頃を二枚合せ衿肩明を自分の左の手前になし、後身頃を上にして山、丈、袖附身八つ口等の筒を附け、後身頃を左に開き



て衽下りの筒附をなすべし。

一　衽を二枚合せ衽丈、裾掛け、衿下、衿下の紬代、衽幅、合裾等の筒をなし、次に衽幅と合裾の筒とに尺度を渡し、其間に筒を附け合裾より上は、合裾と其下の筒とに尺度を當て、其尺度の行次第に筒附をなし、衿附の筒



は衿下の箆より四寸位上まで眞直になして、それより上は自然にふくらして箆附をなし衿附の寸法(劍先より衿下まで)を度り置くべし。

一　衿を二つに折り輪の方を左になし、圖の如く山、衿肩、衽下り等の箆を附け、其箆より衿附と同じ寸法に衿丈の箆を附け一方は丈の箆のみ附け置くべし。

裏衿を附る時は先に表衿に裏衿を接ぎ合せ、折を裏衿の方へ返し隱躾を掛け、然る後箆附をなすべし。

第六　三つ身單衣縫方順序

一　袖　筒袖長袖、元祿袖の縫方は、四つ身單衣の處に說明しあれば此處にては省く。

二　身頃　脊を囊縫になし、後幅及び肩幅の箆を附け、左右の脇縫をなし、脊及び脇縫の折を附け、前幅の箆をなして折を附け置くべし。

三　衽附　左右とも衿下を箆より一寸位上まで、三つ折紬になし、衽附の折を附け置き、前身頃と衽布とを端を揃へて外表に合せ、裾口を七八分殘して、一分位の縫代に衽下りの箆まで縫ひ附け、之を裏に返し、前幅と衽附の折を合せて衽附をなし折を附け、次に裾先を(共通要項に示す)斜に折裾を三つ折紬になすべし。

木綿物は縫込の竪くなるため、囊縫になさず身頃及び衽の裁目を卷縫になし、衽附をなすべし。

四 衿附　衿肩印の附けある方にて縫代二分位に折を附け、山を脊縫に當てゝ待針を刺し、衿肩廻りの處にて身頃の方を淺く衿のつれぬ樣に待針を刺し、衽下りの箆を劍先に當てゝ待針を刺し、衿丈と衿下との箆を合せて待針を刺し、其間にも待針を刺し下前より縫ひ始め、劍先にて小さく一針返し縫をなし、衿肩廻りの處にて縫目を細かく縫ひ、上前も同樣になして衿丈の箆まで縫ひ折を附け、衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ表に返し、次に共通要項に示せる如くなして三つ衿に布を綴ぢ附け、衿のねぢれぬ樣に衿肩の中央及び其間に待針を刺し、衿紐をなし共衿を（共通要項に示す）掛るべし。

五 袖附　袖幅の折を附け、身頃の袖附の處にも折を附け、兩方の折を合せて山及び袖附の箆の處に待針を刺して左右の袖を附け、折を附け身やつ口及び振りを耳紐になし、山の處を三分位の針目にて山に一針、前後に一針づゝ三針耳紐をなすべし。

六 揚及び附紐　共通要項に示せる如くなして、肩揚、腰揚、及び附紐を附るべし。

第二節　三つ身袷

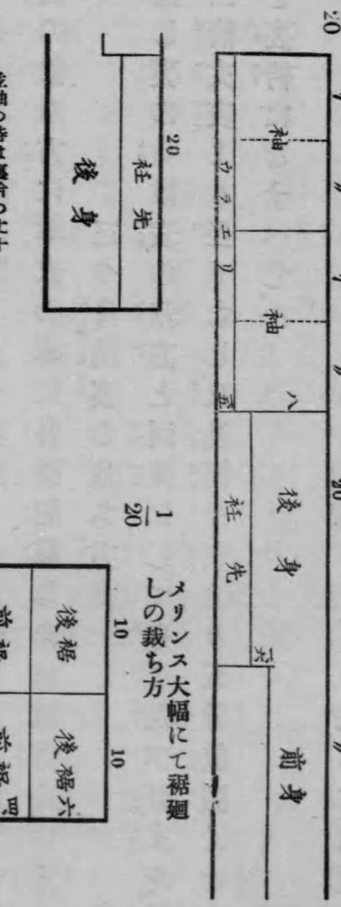
表の裁ち方に單衣の處に各種記載しあれば省く。

三つ身袷裏の裁ち方

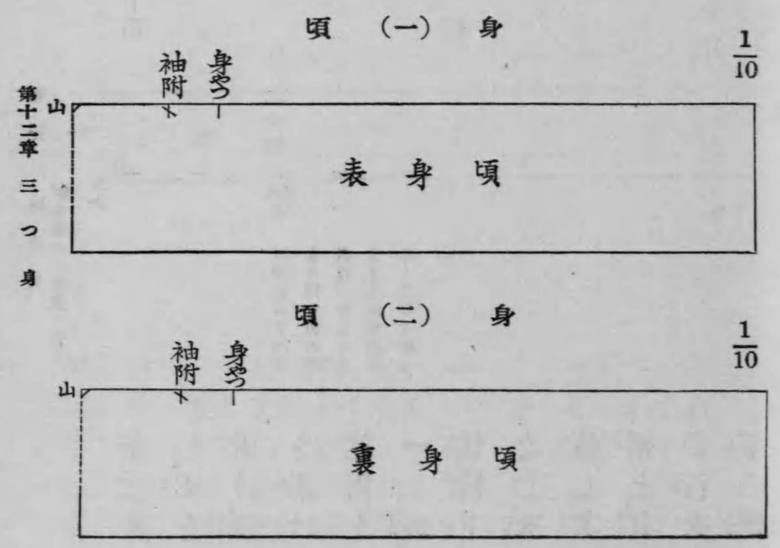
通し裏の時は、表の裁方と同樣にして身丈及び衽丈を、袵の出の二倍丈表より長くなし、又袖幅を表より五分位廣くなし、殘り布を裏衿になすべし。

第一　三つ身裾廻し附裏の裁ち方（裾廻し胴裏）

並幅八尺八寸にて胴裏の裁ち方(元祿袖)



並袖の時は裏衿の丈十分にて衿先の布不用なれば幅少しく狹けれども附紐に間に合せるもよし



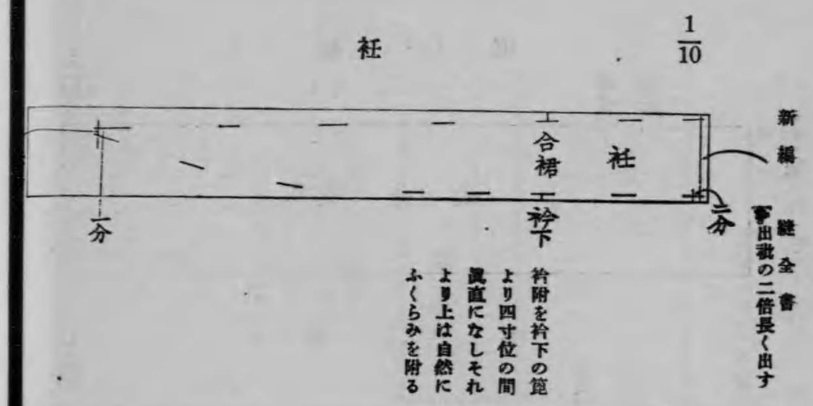
丈を表身頃より出裁の二倍長くなす

第二　三つ身袷通し裏箆の附け方及説明

筒袖、長袖、元祿袖の箆附は、何れも四つ身袷箆附の處に説明しあれば此處にては省く。

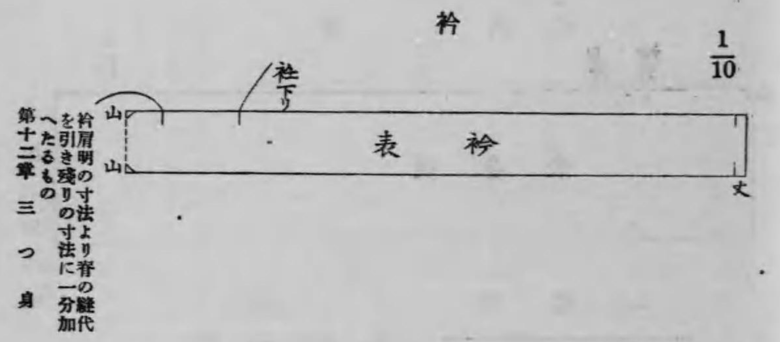
但し筒袖にても袖附の箆をなして振りを明る。

一　表身頃を二枚合せ衿肩明を自分の左の手



前になし、後身頃を上にして山筵をなし、丈を度り袖附け、身やつ口等の筵を附け、後身頃を左に開きて衽下りの筵を附け、次に裏身頃を表身頃と同様に筵附をなすべし。

一　裏衽の上に表衽を載せ衽丈の縫代、衿下、衿下の紵代、衽幅、合裾等の筵をなし、次に衽幅と合裾の筵とに尺度を渡し、其間に筵を附け合裾より上は合裾と、其下の筵とに尺度を當て、其尺度の行次第に筵附をなし、衿附の筵は衿下の筵より五寸位上まで眞直になし

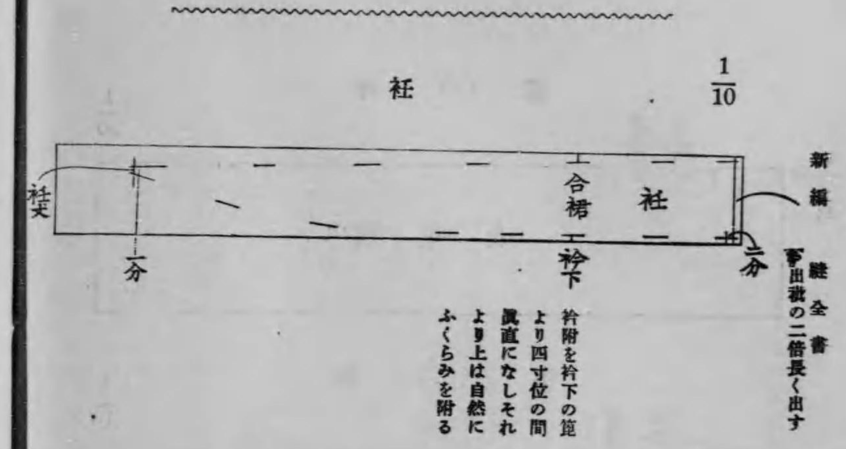


第十二章　三つ身

それより上は自然に、ふくらして筵附をなし、衿附の寸法を（劍先より衿下の間）度り裾先の處にて表をはね、共通要項に示せる如くなして裾形を附るべし。

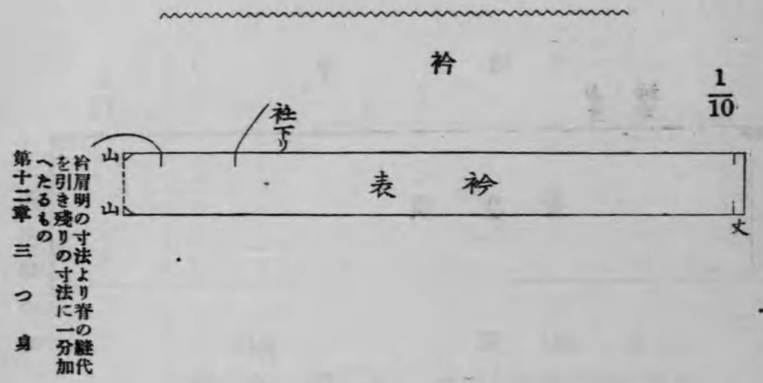
一　衿を二つに折り輪の方を左になし、圖の如く、山、衿肩、衽下り等の筵を附け、其筵より衿附と同じ寸法に衿丈の筵を附け、一方は丈の筵のみ附け置くべし。

裏衿を附る時は先に表衿に裏衿を接ぎ合せ折を裏衿の方へ返し隱躾を掛け、然る後筵附けをなすべし。



前になし、後身頃を上にして山筵をなし、丈を度り袖附け、身やつ口等の筵を附け、後身頃を左に開きて袵下りの筵を附け、次に裏身頃を表身頃と同様に筵附をなすべし。

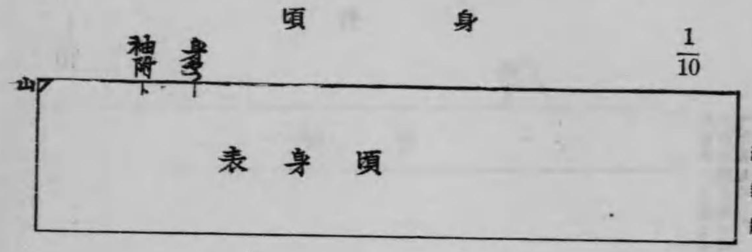
一　裏袵の上に表袵を載せ袵丈の縫代、衿下、衿下の紵代、袵幅、合裾等の筵をなし、次に袵幅と合裾の筵とに尺度を渡し、其間に筵を附け合裾より上は合裾と、其下の筵とに尺度を當て、其尺度の行次第に筵附をなし、衿附の筵は衿下の筵より五寸位上まで眞直になし

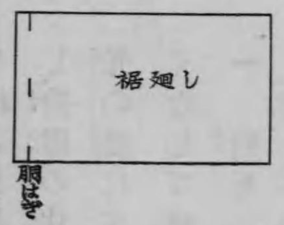


それより上は自然に、ふくらして筵附をなし、衿附の寸法を(劍先より衿下の間)度り裾先の處にて表をはね、共通要項に示せる如くなして裾形を附るべし。

一　衿を二つに折り輪の方を左になし、圖の如く、山、衿肩、袵下り等の筵を附け、其筵より衿附と同じ寸法に衿丈の筵を附け、一方は丈の筵のみ附け置くべし。

裏衿を附る時は先に表衿に裏衿を接ぎ合せ折を裏衿の方へ返し隱躾を掛け、然る後筵附けをなすべし。





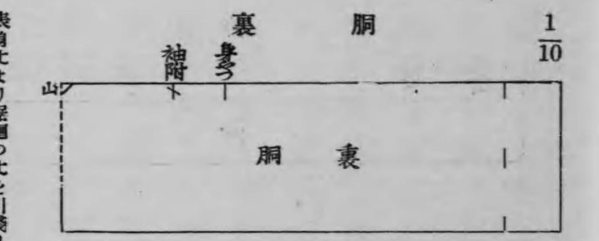
第三　三つ身袷裾廻し附箆の附け方及び説明

筒袖、長袖、元祿袖の箆附は何れも四つ身袷箆附の處に説明しあれば此處にては省く。

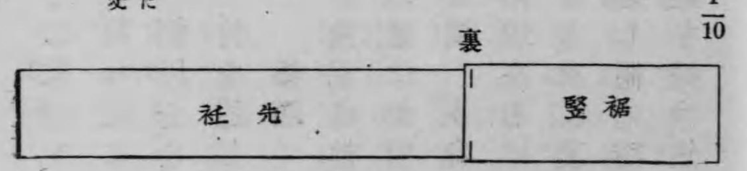
但し筒袖にても袖附の箆をなして振りを明る。

一　袖及び表身頃は通し裏と同様になすべし。

一　裾廻しの前布を二枚重ね、次に後布を二枚重ねて、其上に載せ裾口を右にして、丈を度り胴接ぎの箆をなすべし。



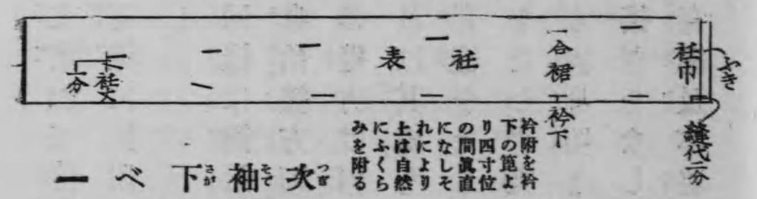
表身丈より裾廻の丈を引殘りの寸法に出袖の二倍を加へたるものを裏の丈とす



袵

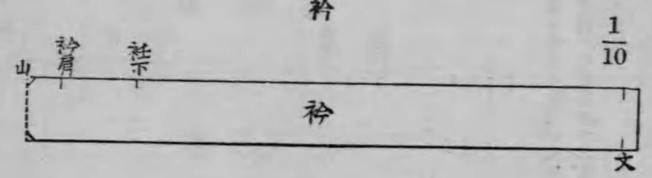
1/10

裏袵の上に表袵を載せて箆附をなしたる圖



一　胴裏を二枚合せ、袵肩明を自分の左の手前になし、後身頃を上にして山箆をなし、丈を度りて胴接ぎの箆をなし、次に表身頃と同様に、袖附、身やつ口、及び袵下り等の箆附をなすべし。

一　竪裾及び袵先の



布を二枚づゝ、縫代丈重ねて待針を刺し、其上に表衽を載せ通し裏と同様に箆附をなし、次に衽先接ぎの箆附をなすべし。

一　衿を通し裏と同様に箆附をなすべし。

第四　三つ身袷縫方順序

筒袖、元祿袖、長袖の縫方は何れも四つ身袷の縫方の處に説明しあれば其處を見るべし。

二　身頃　表身頃の脊縫をなし、後巾及び肩巾の箆を附け左右の脇縫をなし、脊縫及び脇縫の折を附け置き、次に裏身頃も表身頃と同様に脊脇を縫ひ、（裾廻し附の時は胴接ぎをなし、胴裏の方に折を附け躾を掛け、然る後脊縫及び脇縫をなす）折を附け裏表の脊脇の縫目を合せて待針を刺し、裾口を縫ひ合せ表の方に折を附け、之を表に返し袵を定めて、表裏一緒に躾を掛け、脊の縫目を表裏合せて絲の際にて中綴をなし、次に身やつ口の處のつれぬ様に、後身の縫込を斜に折りて、左右の脇の中綴をなし身やつ口を四つ留になし、後及び前の身やつ口を袖附の箆まで縫ひ、表より躾を掛け置くべし。

三　袖附　左右とも後前の袖附を四つ留になして、裏表別々に袖を附け、表は袖の方に、裏は身頃の方に折を附け表に返すべし。

四　衽附　左右の前身頃を裏表平にして衿肩明の處に待針を刺し置き、其端及び衿肩廻しを躾にて綴ぢ附け置き、次に左右の裾形を（共通要項に示す）小針に縫ひて裾を合せ（裾廻し附の時は竪裾布に衽先の布を接ぎ合せ、衽先の方に折りて躾を掛け）表の方

に折りて隱躾を掛け、衽附を篦通り折り身頃を挾みて、裾口の縫目を合せて待針を刺し、衽丈の篦と身頃の衽下りの篦とを合せて待針を刺し、其間にも待針を刺して四つ縫ひになし、表の方に折を附け、次に衿下の折を裏表とも附け、中表になして、折を合せ裾先より衿下の篦まで縫ひ、表の方に折を附け之を表に返し、裏表一緒に躾を掛け、衿附の處を裏表躾にて綴置くべし。

五 衿附　單衣の如く衿を附け三つ衿に布を（共通要項を示す）入れ衿巾を定めて折を附け、衿先を縫ひ衿紵をなし、次に共衿を單衣の如く掛け衩綴をなすべし。

六 揚及び附紐　共通要項に示せる如くなして、肩揚、腰揚及び附紐を附るべし。

第三節　三つ身綿入

裁方積り方篦の附方は袷と同様なれども、袖口に衩を出す處に聊か違ゐあり、其點は四つ身綿入篦附の説明を見るべし。

第一　三つ身綿入縫方順序

一 袖　筒袖、長袖、元祿袖の縫方は四つ身綿入の處に説明しあれば此處にては省く。

二 表身頃　脊縫をなし後幅及び肩幅の篦を附け、左右の脇縫をなし前幅を度りて折りを附け、次に脊及び脇縫の折を附け、衽を篦通り折りて身頃の折と合せて衽附をなし、折を附け衿を單衣の如く附るべし。

三 裏身頃　脊縫及び左右の脇縫、衽附等表身頃と同様になすべし。

但し裾廻し附の時は、裾廻し及び胴裏を別々に脊脇を縫ひ、胴

接ぎをなし胴裏の方に折を附け躾を掛け、次に竪裙布に衽先を接ぎ合せ然る後衽附をなすべし。

四 裾合せ　左右の裙形を小針に縫ひ置き、表身頃を見て表裏の脊縫、及び脇縫衽附等の縫目を合せて待針を刺し、(下前の衽幅の中央より上前の衽幅の中央迄)裾を合せ次に裏衽を見て共通要項に示す如くなして裾を縫ひ表の方に折を附け、之を表に返し裾口に躾を掛け、衽には隱し躾を掛け、表の衿下を折りて躾を掛け置くべし。

五 袖附　裏表の袖巾を箆通り折り、身頃の袖附の處に折を附け、兩方の山を合せて袖附をなし、表は袖の方に折り、裏は身頃の方に折りを附け、表袖の振り及び身やつ口を折りて躾を掛け、次に裏袖の振及び身やつ口に綿を含ませ全體に綿を女物の如く入るべし。

第二　三つ身綿入、紵方順序

三つ身綿入紵方は、四つ身綿入の紵方と同様なれば、其説明を見るべし。

肩揚及び腰揚をなし附紐を附るべし(共通要項に示す)

第十三章　一つ身

第一節　一つ身單衣

第一　普通仕立上り寸法及び圖並に各部の名稱

普通仕立上り寸法

一尺以上一尺四五寸迄

廣袖

一尺八寸内外

筒袖

五寸以上

元祿袖

六寸位

二寸五分以上六寸迄

筒袖

二寸位

元祿袖

三寸位

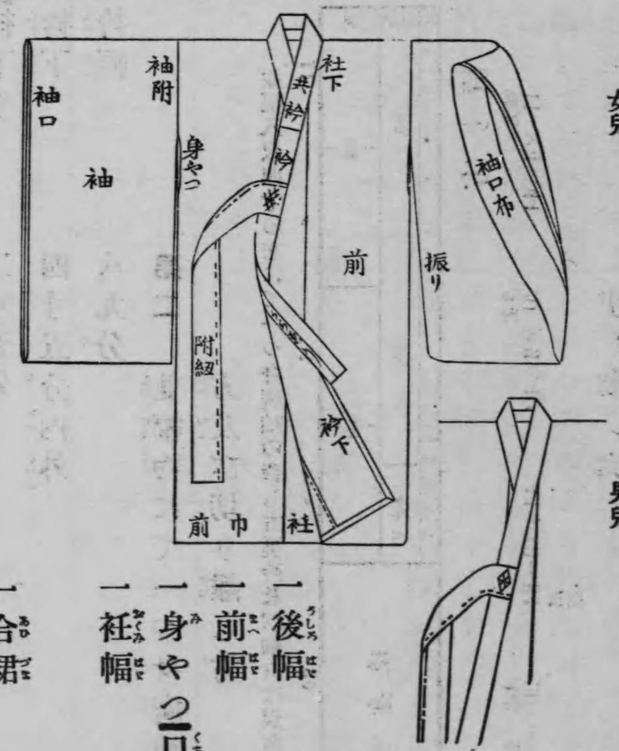
三寸五分以上四寸迄

一袖丈

一袖口

一袖附

一つ身廣袖單衣仕立上りの圖及各部の名稱



一袖幅　五寸内外

一身丈　一尺八寸以上

二尺四寸迄

一後幅　一ばい

一前幅　一ばい

一身やつ口　二寸位

一衽幅　二寸五分以上三寸五分迄

一合裾　衽幅より一分引

一 衽下り　二寸五分
一 衿下　四寸五分内外
一 衿幅　八九分

第二　並幅物にて一つ身廣袖の裁ち方積り方及び切り離し方

並幅八尺四寸の布にて一つ身廣袖の裁ち方裏衿及び袖口は別布を用ゆ

積り方

袖丈 11 ×4＝44　身丈 20 ×2＝40　44＋40＝84 用布

身丈 20 － 衽下 2½＝18 衽丈

切り離し方

八尺四寸の中より四尺四寸を切り離し、其中より幅五寸を切り離して兩袖となし、殘りの布より幅三寸二分を切り離し、丈を一尺八寸二枚取りて兩衽となし、衿丈を三尺四寸に切り殘りを共衿となし、身頃の布を半幅に折り之を横に二つ折となし、輪の方にて衿肩を九分切り込み、後身頃は其儘になし置き前身頃は半幅に切るべし。

第三　並幅物にて一つ身筒袖裁の裁ち方積り方及び切り離し方

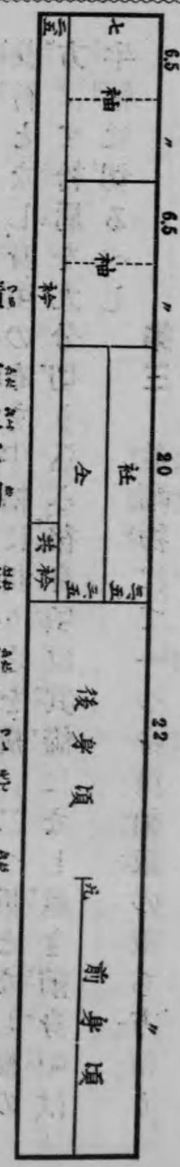
並幅八尺六寸の布にて一つ身筒袖の裁ち方

積り方

袖丈 5.5 ×4＝22　身丈 86 －22＝64　(64＋衽下 2)÷3＝22身丈　22－2＝20衽丈

切り離し方

八尺六寸の中より四尺二寸を切り離し、衿幅を二寸五分切り、次に袖を二尺二寸切り離し、殘り布を縱二つに切りて、兩衽となし、身頃に衿肩を廣袖裁ちと同樣になして切り込むべし。

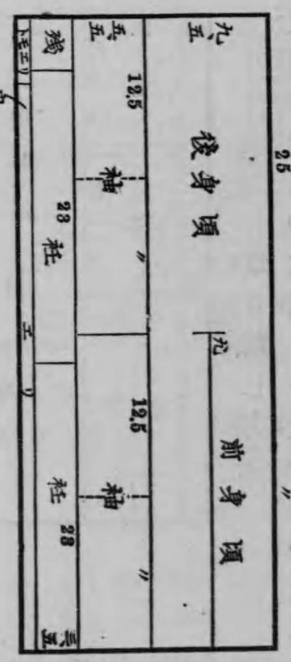


1/20　並幅九尺の布にて一つ身元祿袖の裁ち方

第四　並幅物にて一つ身元祿袖裁の裁ち方

積り方及び切り離し方は筒袖と同じ

第五　大幅のメリンスにて一つ身廣袖裁の裁ち方積り方及び切り離し方



1/20　大幅のメリンスにて一つ身廣袖の裁ち方

積り方
身丈 25 × 2 = 50 用布

切り離し方

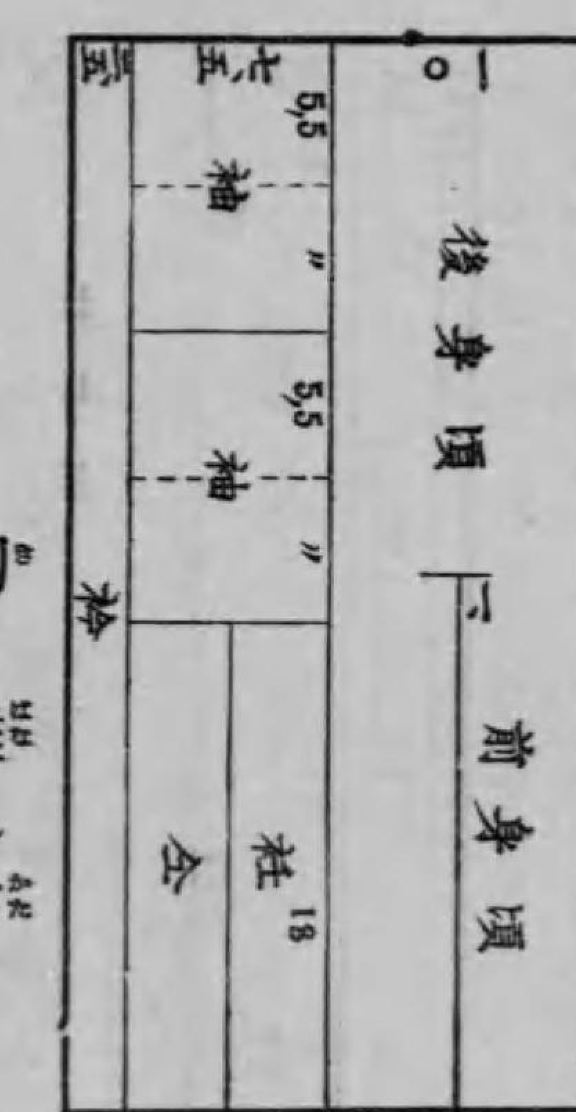
二尺幅の中より幅九寸五分を切り離して、身頃となし半幅に折り、之を横に二つ折となし、輪の方にて衿肩を九分切り込み、後身頃は其儘になし、前身頃を半幅に切り次に幅五寸五分に切り離

して兩袖となし、次に幅三寸五分切り離し丈を二尺三寸に二枚取て兩衽となし、殘りの幅一寸五分の布を衿及共衿となすべし。

第六　大幅物にて一つ身筒袖裁の裁ち方積り方及び切り離し方

1/20

大幅物にて一つ身筒袖の裁ち方



積り方

身丈20×2=40 用布

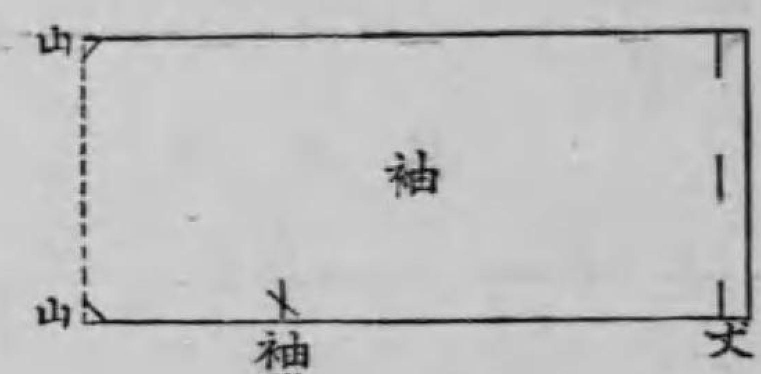
切り離し方

二尺幅を縦二つに切り、一枚を身頃となし、衿肩を切り込み他の一枚の端より幅二寸五分切りて衿となし、次に袖を二尺二寸切り離し、殘りの布を縦に二つに切りて兩衽となすべし。

第七　一つ身單衣箆の附方及び説明(廣袖)

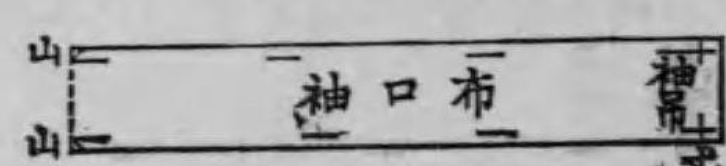
1/10

廣袖



1/10

袖口



袖口布の丈は口先の方にて袋袖丈より五厘或は一分短く奥の方は袖丈と同寸に箆附をなす

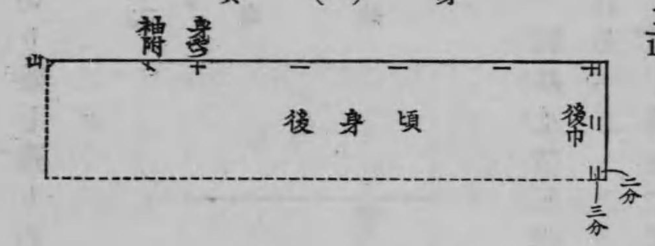
一　袖を二枚合せ丈を二つに折り、輪の方を自分の左になして圖の如く山、丈、袖附等の箆附をなすべし。

一　袖口布を二枚合せて、二つ折になし山、丈、幅等の箆附をなすべし。

筒袖及び元祿袖の箆附は四つ身單衣と同樣なれば其說明を見るべし。

但し筒袖にても袖附の箆をなし振りを明る。

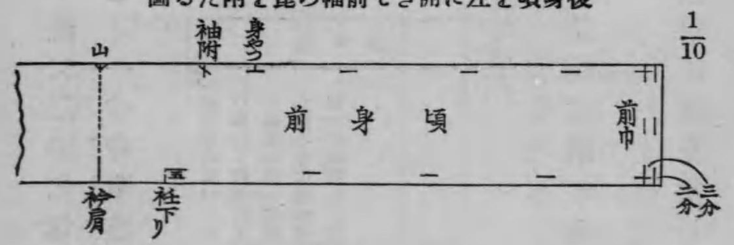
身頃（一）



身頃（二）

圖の如く山、丈、袖附、身やつ口、後幅、肩幅等の箆を附け後身頃を左の方に開きて、衽下り前巾及び其間の箆附をなすべし。

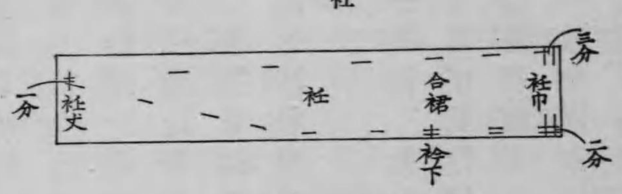
後身頃を左に開き前幅の箆附を圖る



一　身頃を半幅に折り、衿肩明を自分の手前になし、後身頃を上にして、圖の如く山、丈、袖附、身やつ口、後幅、肩幅等の箆を附け後身頃を左の方に開きて、衽下り前巾及び其間の箆附をなすべし。

一　衽を二枚合せ衽丈、裾掛け、衿下の紮代、衽幅、合裾等の箆をなし、次に衽幅と合裾の箆とに尺度を渡し、

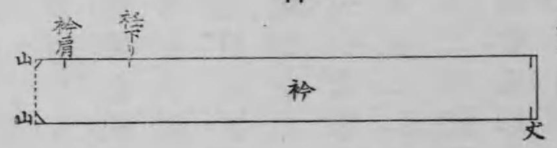
衽



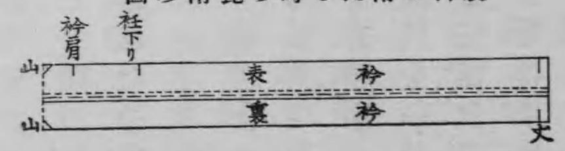
衿附を衿下の箆より四寸位の間眞直になしそれより上は自然にふくらみを附る

其間に箆を附け合裾より上は合裾と其下の箆とに尺度を當て、其尺度の行次第に箆附をなし、衿附の箆は衿下の箆より四寸位上まで眞直になし、夫より上は自然にふくらして箆附をなし、衿附の寸法を劍先より衿下迄度

衿



裏衿の附たる時の箆附の圖



り置くべし。

一　衿を二つに折り輪の方を左になし、圖の如く山、衿肩、衽下り等の箆を附け其箆より衿附と同じ寸法に衿丈の箆を附け、一方は丈の箆のみ附け置くべし。

裏衿を附る時は先に表衿に裏衿を接ぎ合せ、折を裏衿の方に返し隱躾を掛け、然る後箆附をなすべし。

第八　一つ身單衣縫方順序

一　廣袖　袖を左右とも外表にして、縫代を一分位になし袖附の方にて五分袖口の方にて二寸位殘して縫ひ、之を裏に返し丈の箆通り袖下を縫ひ、袖附を右にして自分の手前に折を附け、他の一枚を向ふに折を附け、次に袖口布の下を箆通り縫ひて輪となし、折を附け袖布と袖口布との山、及び袖下の縫目を合せて待針を刺し袖口の廻りを縫ひ合せ、表袖の方に折を附け表に返し、袖口布を五厘程表に出して、一緒に躾を掛け、袖口の奥を折りて紵け附け、袖幅の箆を附け、之を表に返し置くべし。

筒袖及び元祿袖の縫方は、四つ身單衣と同樣なれば此處にては省く。

二　身頃　後幅の箆通り左右とも折を附け、身やつ口の箆を合せ左右とも後身頃を見て脇縫をなし、前身頃の方に折を附け、前幅の箆通り折を附け置くべし。

三　衽附　普通裏縫になすものなれども、木綿物は縫込のかたくなるゆへ裏縫になさず、身頃及び衽の裁目を卷縫になし置き、左右とも衿下を箆より一寸程上まで三つ折紵になし、衽附の折を附け身頃の折と合せて待針を刺し、衽附をなし衽の方に折を附

け、次に裾先を共通要項に示す如くなして、裾を三つ折紵になすべし。

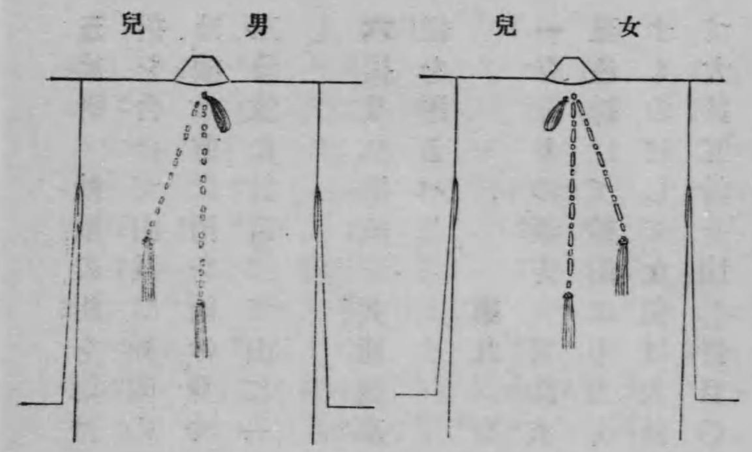
四 衿附　衿肩印の附ける方にて縫代二分位に折を附け、山を身頃の衿肩の中央に當て待針を刺し、衿肩廻しの處にて身頃の方を浅く、衿のつれぬ様に待針を刺し、衽下りの箆を劍先に當て待針を刺し、衿丈と衿下との箆を合せて待針を刺し、其間にも待針を刺し、下前より縫ひ始め劍先にて小さく一針返し縫をなし、衿肩廻しの處にて縫目を細かく縫ひ、上前も同様になして衿丈の箆まで縫ひ、衿の方に折り衿幅を定めて折を附け衿先を縫ひ、表に返し次に三つ衿に布を共通要項に示す、如くなして入れ衿のねぢれぬ様に、衿肩の中央及び其間に待針を刺し、衿紵をなし共衿を（共通要項に示す）掛るべし。

五 袖附　袖幅の折を附け、身頃の袖附の處にも折を附け、兩方の折を合せて山、及び袖附の箆の處に待針を刺して、左右の袖を附け、袖の方に折を附け、身やつ口、及び振りを耳紵になし、山の處を三分位の針目にて山に一針前後に一針づゝ三針耳紵をなすべし。

六 揚及び附紐　共通要項に示せる如くなして肩揚、腰揚及び附紐を附るべし。

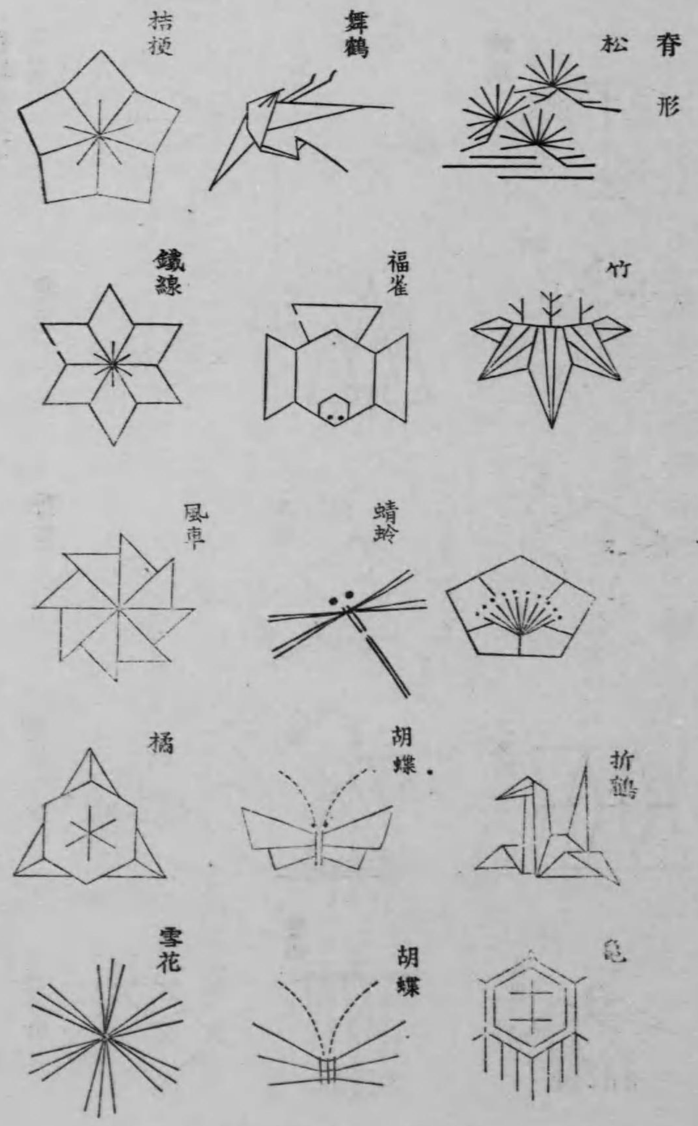
第九

一 脊守りの縫方　宮詣衣の脊守は紅白の絲、又は青、黄、赤、白、黑の五色絲にて衿附より五分程下りて、身丈の三分の一位の間になすものにして、女兒は大針を脊に七針、右の方へ二寸程斜に開きて大針五針を出し（針目の間を一分五厘とす）男兒は女兒の反對



に小針のみを表はして左の方へ斜に開きて、圖の如く縫ふ習はせあり、然して之を縫ふには豫め針目を度りて紙に描き、之を脊に綴ぢ附け置き其上より縫ひ、圖の如く三ヶ所に結びて留め、然る後紙を取り去るなり。

平常着の脊守は、衿附より七分程下りたる處に、好みの形を縫ひ置くべし。



春紋形(二)

第十 附紐飾りの圖

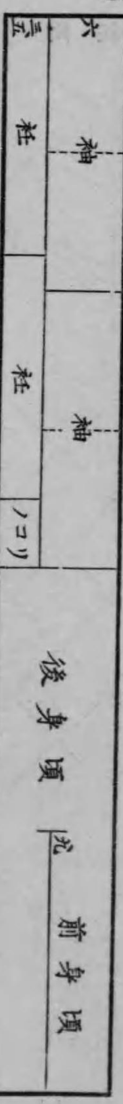
(附紐飾)

第二節　一つ身袷

表の裁ち方は單衣の處に各種記載しあれば此處にては省く。

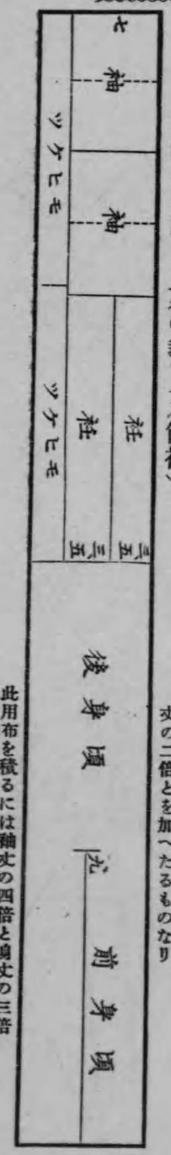
第一

並幅にて一つ身袷通し裏の裁ち方（廣袖）



此用布を積るには袖丈の四倍と身丈の二倍とを加へたるものなり

並幅にて同じく裏の裁ち方（筒袖）



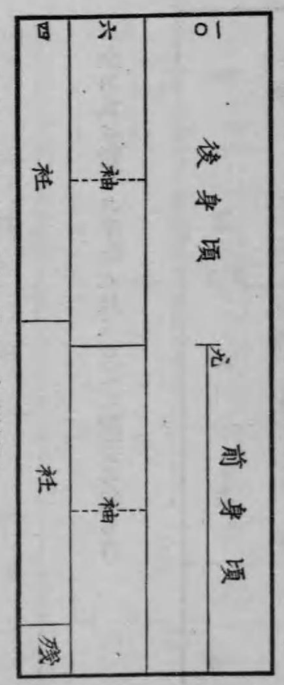
此用布を積るには袖丈の四倍と身丈の三倍とを加へたるものより袂下りを減すべし

總て着物の裏は身丈及び袂丈を表より出袵の二倍長く袖丈は表と同寸になすべし。（第二も是れに同じ）

第二

大幅物にて一つ身袷通し裏の裁ち方（廣袖、元祿袖）

二尺幅にて一つ身通し裏の裁ち方（廣袖）



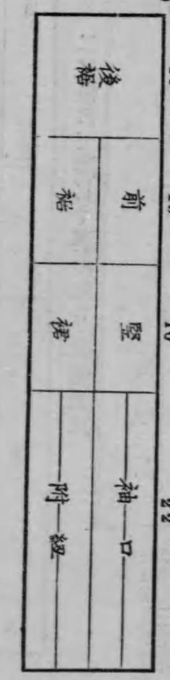
此用布を積るには身丈を二倍すべし

二尺幅にて同じく裏の裁ち方（元祿袖）

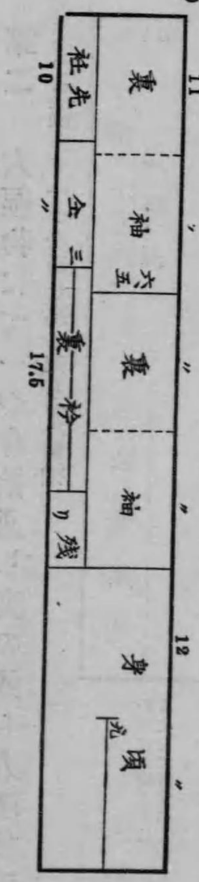
此用布を積るには身丈を二倍すべし

第三　一つ身袷廣袖裁ち裾廻し附裏の裁ち方（裾廻し胴裏）

メリンス半幅五尺二寸にて裾廻しの裁ち方（袖口附紐共）



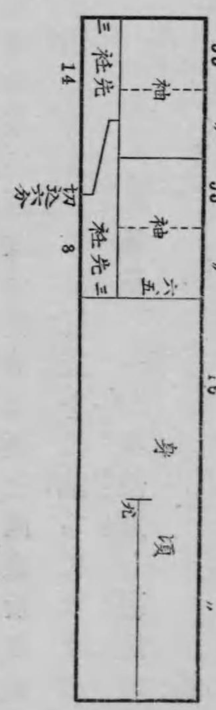
金巾或は新モス半幅六尺八寸にて胴裏の裁ち方



第四　一つ身袷筒袖裁ち裾廻し附裏の裁ち方（裾廻し胴裏）

メリンス半幅四尺にて裾廻しの裁ち方（袖口附紐共）

金巾或は新モス並幅五尺四寸にて胴裏の裁ち方



衽先鈎の切り離し方

衽先の布を圖の如く手前の右端より八寸左端の向ふ側にて八寸の處に六分の切込を入れ夫より斜に切り離すべし。

元祿袖裁の裏は筒袖裁の裏と同樣なり。

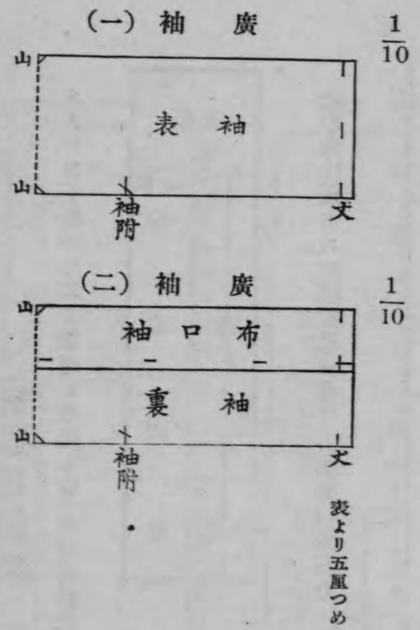
但し袖丈長き故、衽先を棒裁ちになすべし。

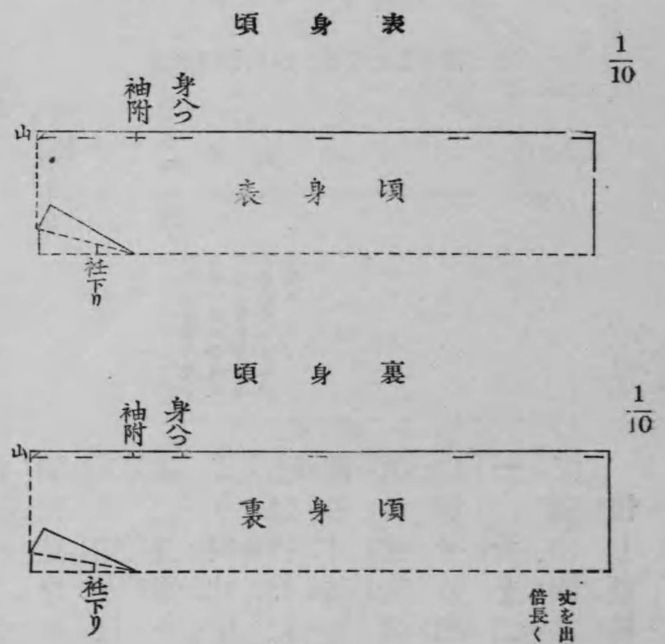
第五　一つ身袷通し裏箆の附方及び説明

筒袖及び元祿袖の箆附は四つ身袷と同樣なれば其處を見るべし。

但し筒袖にても袖附の箆をなし振りを明る

一　表身頃を半幅に折り、衿肩明を自分の左の手前になし、後身頃を上



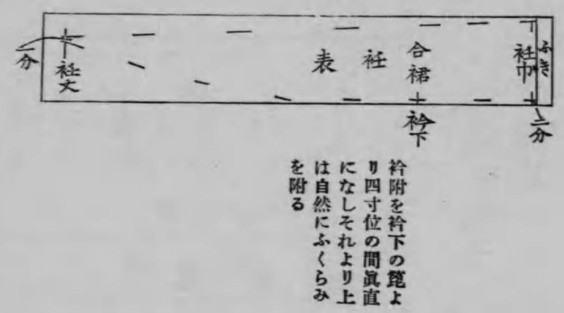


にして山、袖附、身やつ口、後巾及び肩幅等の箆を附け、圖の如く衿肩の處にて、後身をはねて、衽下りの箆を附け、次に裏身頃を表身頃と同樣になして箆附をなすべし。

一　裏衽の上に表衽を載せ、衽丈、裾の縫代衿下、衿下の紵代、衽幅、合裙等の箆をなし次

衽

裏表四枚重ねて篦附をなす圖

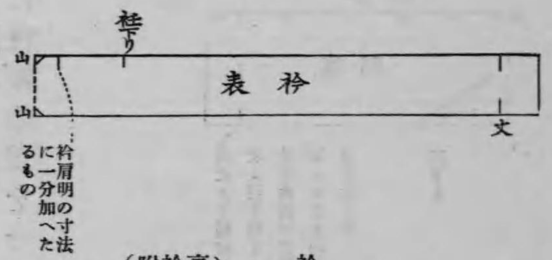


に衽幅と、合裾の篦とに尺度を渡し、其間に篦を附け、合裾より上は合裾と、其下の篦とに尺度を當て、其尺度の行次第に篦附をなし、衽附の篦は、衽下の篦より四寸位上まで眞直になし、夫より上は自然にふくらして篦附をなし、衽附の寸法を、劍先より衽下迄度り置き、次に裾先の處にて表をはね、共通要項に示せる如くなして裾形を附るべし。

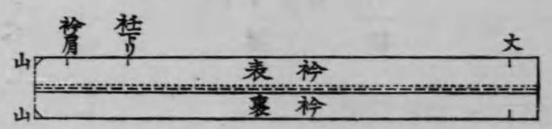
一　衽を二つに折り輪の方を左にして圖の如く篦附をなすべし。

但し裏衽の附く時は、表衽に裏衽を

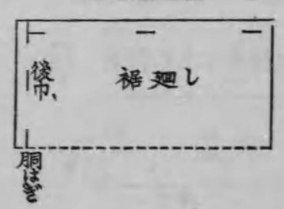
衽



（附衽裏）　衽



裾廻し



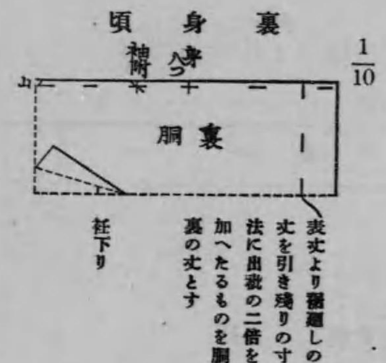
接ぎ合せ裏衽の方に折りて、隱躾を掛けたる後篦附をなすべし。

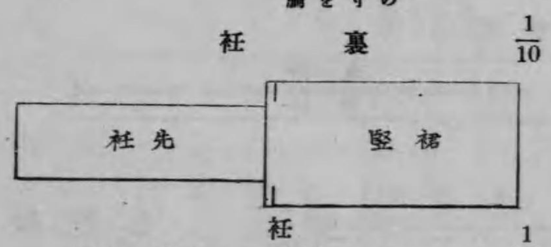
第六　一つ身袷裾廻し附裏篦の附方及び説明

一　袖及び表身頃は、通し裏と同様になすべし。

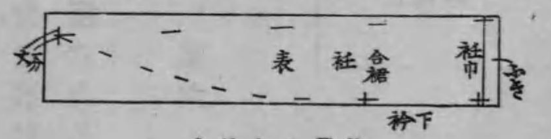
一　裾廻しの前布を二枚重ね、次に後布を半幅に

折り其上に載せ、裾口を右になして丈を度り胴接ぎの箆をなし、次に後幅の箆をなすべし。

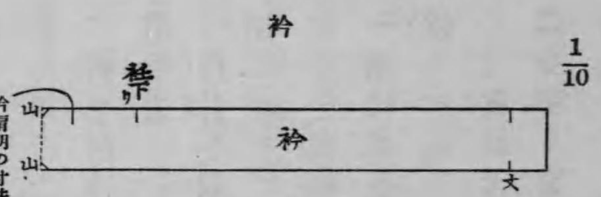


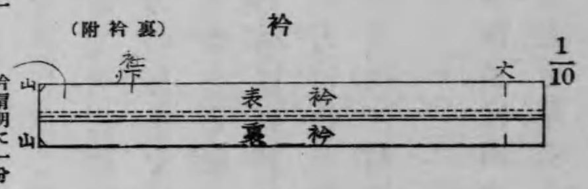


裏衽の上に表衽を載せて箆附をなす圖



一　胴裏を半幅に折り、衿肩明を自分の左手前になし、後身頃を上にして山箆をなし、丈を度りて胴接ぎの箆をなし、次





に表身頃と同様に、袖附、身やつ口、後幅、肩幅、及び衽下り等の箆附をなすべし。

一　竪裾及び衽先の布を、二枚づゝ縫代丈重ねて待針を刺し、其上に表衽を載せ、通し裏と同様に箆附をなし、次に衽先接ぎの箆を附るべし。

一　衿も通し裏と同様になして箆附をなすべし。

第七　一つ身袷縫方順序

一　廣袖　左右とも裏袖に袖口を掛け、躾を掛け、表袖と裏袖の山を合せて、待せて袖口を縫ひ、表袖の方に折を附け、之

針を刺し、袖丈の箆を合せて

を表に返し、袖口襵を五厘程出して、表裏一緒に假に躾を掛け、裏袖を見て袖幅の箆を附け、振りの處を表は箆通り、裏は箆の下に折を附け、之を裏に返し折を合せて兩方の振りを縫ひ、表袖の方に折を附け置き、次に袖口の假躾を袖丈の箆より一寸位上まで取り去り、一方の振りを中に入れ、表を合せて袖口の縫目を合せて待針を刺し、振りの縫込は裏の方に折りて待針を刺し、振りを右に持ちて、右袖は表袖を見て。左袖は裏袖を見て、袖下を四つ縫になし、表袖の方に折を附け、之を表に返し袖口及び振りに裏表一緒に躾を掛け、次に袖下にも躾を掛け袖附の折を箆通り附け置くべし。

元祿袖及び筒袖は、四つ身袷と同樣なれば其縫方を見るべし。

二　身頃　裏表とも單衣の如く左右の脇縫をなし（裾廻し附の時は胴接ぎをなし、胴裏の方に折を附け躾を掛け、然る後脇縫をなす）前身頃の方に折を附け、次に裏表の縫目を合せて待針を刺し、裾口を縫ひ合せ、表の方に折を附け、之を　し襵を定めて、表裏一緒に躾を掛け、次に身やつ口の處の　に、後身頃の縫込を斜に折りて、左右の脇の縫目を表裏合せて絲の際にて、中綴をなし、身やつ口を四つ留になし、後及び前の身やつ口を袖附の箆まで縫ひ表より躾を掛け置くべし。

三　袖附　左右とも後前の袖附を四つ留になして、裏表別々に袖を附け、表は袖の方に裏は身頃の方に折を附け、表に返し置べし。

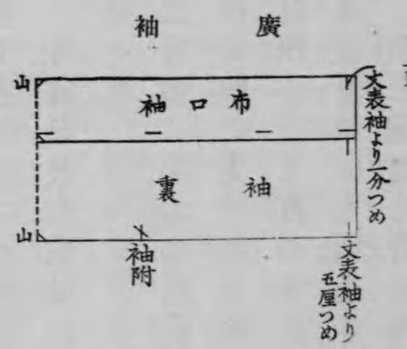
四　衽附　左右の前身頃を裏表平にして、其端及び衿肩廻しを綴ぢ、裏身頃を見て前幅の箆を、單衣の如く附け折を附け置き、左右の裙形を小針に縫ひて（共通要項に示す）裾を合せ（裾廻し附の時

は竪裙布に衽先の布を接ぎ、合せ）表の方に折、隱躾を掛け、衽附を篦通り折り、身頃を挾みて裾口の縫目を合せて待針を刺し、衽丈の篦と身頃の衽下りの篦とを合せて待針を刺し、其間にも待針を刺して四つ縫になし、表の方に折を附け、次に衿下の折を裏表とも附け中表になして折を合せて、裾先より衿下の篦まで縫ひ、表の方に折を附け、之を表に返し、裏表一緒に躾を掛け、衿附の處を裏表躾にて綴ぢ置くべし。

五　衿附　單衣の如く衿を附け、三つ衿に布を入れ、衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ衿紐をなし、共衿及び衩綴ぢを、共通要項に示せる如くなし、次に肩揚及び腰揚をなし附紐を附け、脊守を衿附より七分下りたる處に、前に示したるが如き脊紋の形を好みに從ひ縫ひ置くべし。

裁ち方積り方篦の附け方は袷と同様なれども、袖口に衩を出す處に聊か違あれば其點を左に示す。

1/10



第三節　一つ身綿入

第一　一つ身綿入篦の附け方

元祿袖及び筒袖は、四つ身綿入と同様なれば、其說明を見るべし。

第二　一つ身綿入縫方順序

一　廣袖　左右とも表袖を縫ひ折を附け、之を表に返し躾を掛け、袖口の廻りを折りて躾を掛け、次に裏袖に袖口を掛けて、躾を掛け、袖下を縫ひ、折を附け、躾を掛け、表袖幅の篦を附け、裏は袖口の端より度

りて、表袖幅より五分廣く篦を附け置くべし。

元祿袖及び筒袖は、四つ身綿入縫方と同樣なれば其説明を見るべし。

二 身頃　左右の脇縫をなし、前幅を度り折を附け、表脇の縫込を前身頃の方に折り、次に表衽を篦通り折りて、身頃の折と合せて衽附をなし、衽の方に折を附け單衣の如く衿附をなすべし。

三 裏身頃　左右とも脇縫及び衽附を表身頃と同樣になすべし。

但し裾廻し附の時は、裾廻し及び胴裏を別々に脇縫をなし、胴接ぎをなし、胴裏の方に折を附け躾を掛け、次に竪裾布に衽先を接ぎ合せ、然る後衽附をなすべし。

四 裾合　左右の裾形を小針に縫ひ置き、次に表身頃を見て、表裏の脇縫及び衽附の縫目を合せて待針を刺し、下前の衽幅の中央より、上前の衽幅の中央まで裾を合せ、裏衽を見て共通要項に示せる如くなして裾を縫ひ、表に返し裾口に躾を掛け、衽には隱躾を掛け、表の衿下を折りて、躾を掛け置くべし。

五 袖附　裏表の袖幅を篦通り折り、身頃の袖附の處にも折を附け、兩方の山を合せて袖附をなし、表は袖の方に折り、裏は身頃の方に折を附け、裏袖の振り及び身八つ口を折りて躾を掛け、次に裏袖の振り及び身八つ口に綿を含ませ、本裁女物綿入の處に示せる如くなして全體に綿を入るべし。

第三　一つ身綿入紵け方順序

一 裾の出褪を定めて、綿を能く含めて躾にて假に綴ぢ置き、次に衽を衿先より二三寸上まで中綴をなすべし。

二 表裏の三つ衿を合せて待針を刺し、衿を引き合せ置き、袖口

に綿を含ませ、袖下の縫目より紵け始め(元祿袖は袖口を四つ留になす)其絲にて續きに袖下の縫目を裏表綴ぢ、次に前後の袖附及び身八つ口に四つ留をなし、袖下の縫目より身八つ口を續きに紵け、其絲にて袖下の縫目を裏表綴るべし。

三　裏の衿下に綿を含ませ、衿下の箆を合せて表と一緒に躾にて綴ぢ、其處を紵け、次に衿肩の中央及び衽先を裏表合せて待針を刺し、衿附の縫目の際にて裏表綴ぢ、三つ衿に綿、或は布を入れ衿幅を定めて折を附け、衿先を縫ひ衿紵をなし、次に共通要項に示せる如く、共衿を掛け左右の脇縫に布綴をなし次に衽綴をなすべし。

肩揚及び腰揚をなし、附紐を附け(共通要項に示す)次に脊守縫を衿附より七分、下りたる處に好みの形を縫ひ置くべし。

第十四章　帶類

第一　鯨帶(腹合帶抱合帶とも云ひて、片側に別布を用ゆるもの)

一　兩側とも布の裏より火熨斗を掛け、耳のつれたるものは、先に鏝にて耳の處を伸し、中央の丈と比べて兩耳とも、耳の方を少しく弛み加減になし、表を合せて幅の中央にて一尺置位に平に待針を刺し、耳より五分程入りたる處を、兩側とも躾絲にて假綴ぢをなし、仕立上り寸法より一分、廣く幅を定めて、兩方の縫込寸法を同じくして、先一方に通し箆を附けるべし。

二　縫方　縫始を二寸位返し縫になし、それより先は地質の厚きものは一針ぬきになし、薄きものは小針に串縫になし、三寸位縫

ては、絲を引きぬき、絲こきをなし、終りの處にて縫始めの如く、二寸程返し縫をなし、次に其絲より幅を度りて通し箆を附け、丈の中央にて帶幅丈殘して同樣に縫ひ、丈の兩端を躾にて假綴ぢをなして通し箆を附け、返し縫になし、縫目全體に平鏝を掛け、丈の兩端の縫込を、地質の厚き方へ指先にて折を附け、兩横の縫目の際にて縫込を少しく釣加減になして、一針ぬきに叮寧に綴ぢ附け、次に兩横の縫目を同樣指先にて折を附け、丈の縫込に其端をまつりつけ置くべし。

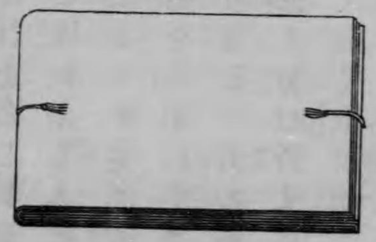
三　心布に霧を吹きて皺を伸し、幅の一方の端を淺く、眞直に通し箆を附けて裁ち落し、（二枚心の時は一枚は仕立上り寸法に裁切り、他の一枚は帶布の縫込丈狹く裁ち、廣き心の上に載せ廻りを躾にて綴ぢ附け、狹き方に眞綿を引く）丈の一端を平に切り、其上に眞綿を延して引き置き、次に帶芯の縫込のある方を出して下に置き、其上に芯地の綿の引きある方を載せ、幅の中央にて端に待針を刺し、其處を右になし右手にておさえ、左手を帶地と芯地の間に差し入れ、帶地のみ靜に引きのばし、其處を右手にて芯の上よりおさえ、左手を出しておさえ直し待針を刺し、又其待針の處を右手におさえ、左手を帶地と芯との間に入れて同じ事を繰り返し、一方の端迄待針を刺し、芯の周圍を縫込に綴ぢ附け、芯の長き分は帶丈に揃へて裁落し、其上に眞綿を引き四角を指先にて能く表に出し、心地を中になして中央の縫殘しの少し手前まで卷き、縫殘しの處より手を入れ、順次に表に引返し、他の一方も同樣になして表に返し、丈及び幅を能く引合せて縫目を正しくなし、周圍に針目七八分位に躾を掛け、縫ひ殘しの處を細かく

紵け紙を當てゝ火熨斗を兩側に掛け、第一圖の如く疊みて假綴ぢをなし壓を掛るべし。

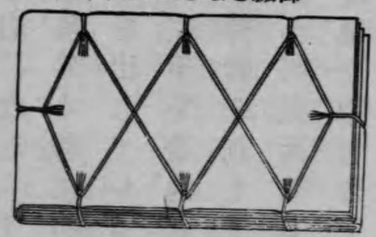
飾綴をなす場合には壓をなしたる後、第二圖の如く絲を掛るべし。

以上は兩側とも地質の同じきものなれば、若し片側地質の異りたるもの、例へば博多と縮緬等の如きものゝ時は、縮緬の方を幅丈とも少しく釣加減にして假綴ぢをなし、其他は前と同樣になすべし。

假綴をなしたる圖（一）



飾綴をなしたる圖（二）



第二　丸帶

一　布の裏より火熨斗を掛け（耳のつれたるものは先に鏝にて耳の處を伸す）平になし、表を中にして幅を二つに折り、横の織り出しを能く合せて鯨帶の如く躾にて假綴ぢをなし、仕立上り寸法より五厘廣く、輪の方より幅を度りて通し箆を附るべし。

二　縫方心布の作り方、綴ぢ方等總て鯨帶に倣ふべし。

第三　女兒帶

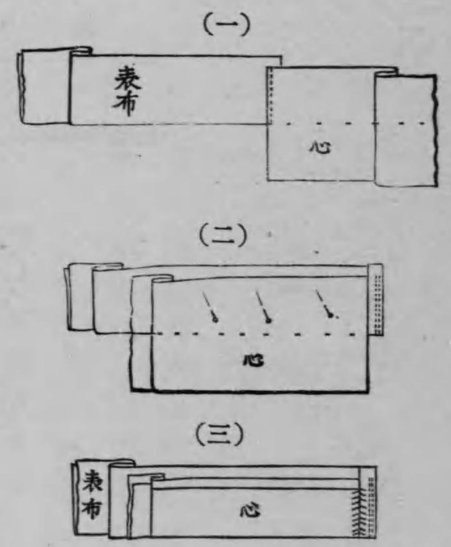
一　女兒用に定めたる物もあれども、メリンス等にて仕立る場合には幅三寸五分以上五六寸位にして丈を六尺以上八九尺位とし、其幅により丈を漸次長くなし、其年齡體格により幅丈とも加減すべし。

二　帶地を丸帶の如く、假綴ぢ及び箆附をなし、縫方心布の作り方綴ぢ方等は、總て鯨帶の處に說明しあれば其處を見るべし。

第四　男帶

一　兩方の耳の丈を中央の丈と比べて、紵縮みの分として、裏より鏝にて少しく伸し置き、又全體に裏より火熨斗を掛け、中表に幅二つに折三寸置位に幅の箆を附け、其箆通り縱に裏の方に折を附け、其上に鏝を掛け、次に丈の兩端を幅の折の處より、布目通りに輪の處より一分手前まで半返し縫になし置くべし。

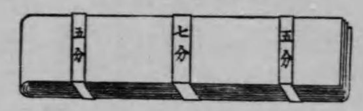
二　心布に霧を吹きて皺を伸し、幅の一方の端を淺く眞直に通し箆を附て裁ち落し、帶幅より五厘狹く幅を度りて通し箆を附け、其箆より縫代丈狹く度りて通し箆をなして裁ち落し、幅の箆通り縱二つに折り、片側に直綿を薄く引き幅廣き方を第一圖の如く縫込の上に載せて綴附け、次に第二圖の如く折り返して帶の上に載せ、鯨帶の如くなして下側の一枚に針の掛らぬ樣に待



て待針を刺し、それより第一の待針を抜き取り、第二の待針を刺し、それより第二の待針を抜き取りて折目を合せて待針を刺し、それより第三第四と順次に之を繰り返し、假躾をなし折山の少しく內側を五厘位の針目にて、一針毎に拔き出して順次に紵終り、火熨針を刺し、狹き方を縫込丈裁ち落し、第三圖の如く縫込の端とを突き合せ縫になし、一方の端も芯の長き分を裁ち落して同樣になし、之を表に返し角を能く出し心を包みたる方を向ふになして第一の待針の處にて折目を合せ

斗を掛けて(木綿なれば其儘)圖の如く八つ折に疊みて帶紙にて卷き壓をなすべし。

仕立上り圖



一　幅及び丈の違ひあるのみにて、其他は總て男帶と同樣なり。

第五　男兒帶

第十五章　參考の部

第一　襦袢の袖縫方各種

一　普通筒袖

メリンス半幅長さ八寸位の布を縱二つに切り、裏も同寸に切り中表に合せて中央に待針を刺し、中央にて口明五寸に縫ひ、口明を四つ留になし、一方は表布を見て他の一方は裏布を見て、袖下を四つ縫になし、之を表に返し、袖口廻り及び縫目に躾を掛るべし。

仕立上り圖

二　鯉口筒袖

メリンス半幅長さ一尺位の布を縱二つに切り、裏も表と同寸に切り、中表に合せて一方は表布を見て、他の一方は裏布を見て、

仕立上り圖

端より口明の五寸を縫ひ表に返し、縫始めの處を口明の處に被せて、四つ留をなし、縫込の端を揃へて四つ縫になし、之を表に返し袖口の廻り及び縫目に躾を掛るべし。

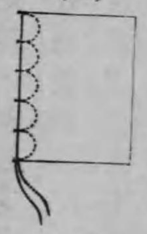
又袖口明の處を縫はず、別布にて縁を取るもよろし。

三　袖口縫縮めの筒袖

メリンス半幅長さ一尺の布を縦二つに切り、裏も同寸に切り中表に合せて口先を縫合せ、一方は表布を見て、他の一方は裏布を見て、袖下を四つ縫ひになし、之を表に返し、袖口の廻り及び縫目に躾を掛け、次に袖口の廻りを、圖の如く山形に細かく縫ひ、其絲を適宜の寸

仕立上り圖（一）

袖口縫縮めの筒袖を仕立てたる圖（二）



法に引き縮め、留め置くべし。

第二　簡單にして着心地よき肌襦袢の作り方

一　身丈は各自隨意

但し着用の際、腰紐の邊り高くならぬやう、前身丈を三四寸短くなすものより。（一反にて三枚裁てば、衿にはぎなくして都合よろし）。

一　脇縫をなす時、圖の如く馬乗迄斜に縫ひ、耳の儘になし置き、

裾口を三つ折になさず、裁目の儘にて卷縫をなし、其他は普通襦

袢と同様になすべし。

裏より片身頃を見たる圖

第三　二尺幅にて本裁襦袢の裁ち方

第四　メリンス半幅にて撮み衿長襦袢の裁方

一　衿肩明三寸になし脊にて九分縫込む。

一　身丈は前丈を普通より猶五分長くすべし。

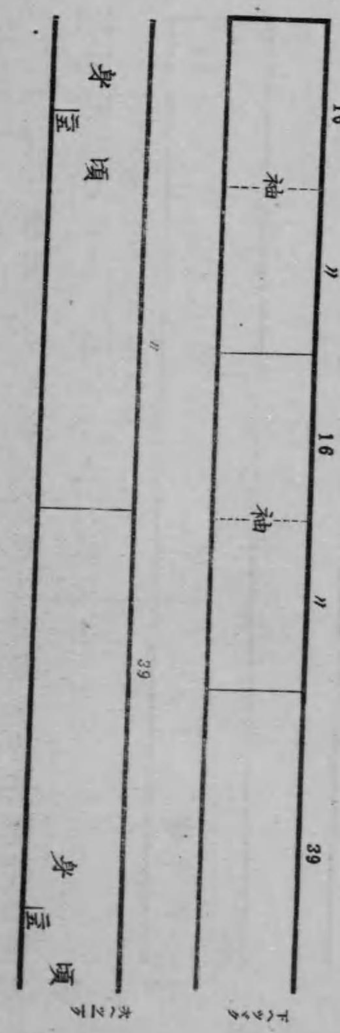
一　衿の點線の處を褄口より八分切込む。

一　此裁方の寸法を加減して、四つ身長襦袢に應用するもよし。

一　長襦袢の縫直しをなす時、衿肩を前身の方へ明け直して後前になし、元の衿肩には裏より布を當て置くべし。

第五　並幅の片面物にて女物の裁ち方

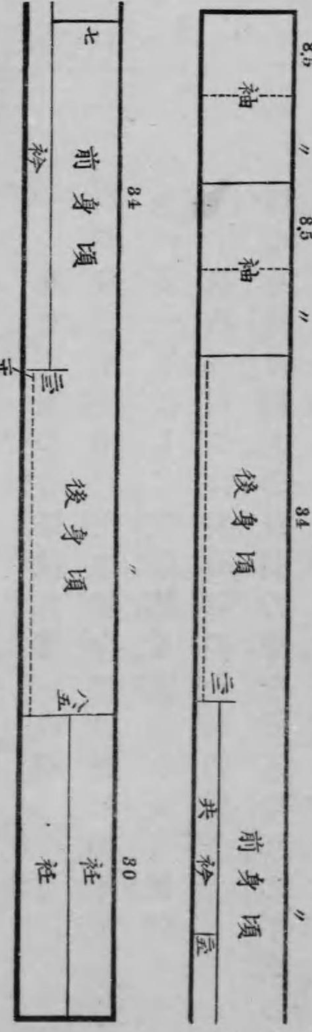
並幅二丈六尺八寸の片面物にて女物の裁ち方



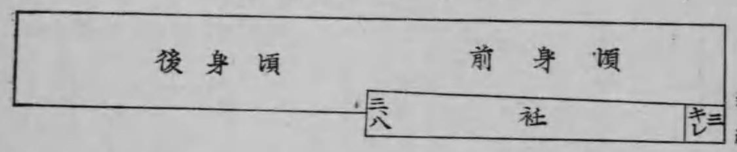
衿幅は布の三つ割。

衿の接ぎ合せは短きものを兩端に接ぎ附け、折は何れも長き方へ返し、共衿の如くに見せるべし。

第六　並幅にて四つ身前衿裁の裁ち方



四つ身の身頃



第七 四つ身袵裁ち替への圖

四つ身の裙先損じたる場合には、圖の如く裁ち替へれば見へも、美しく又前幅も廣くなりて便利なり。

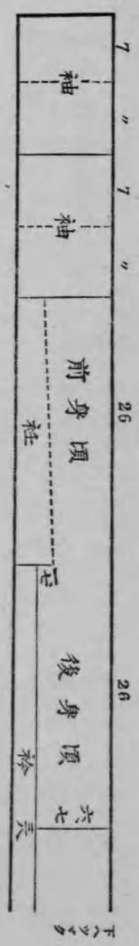
第八 四つ身裏附幅の不揃の場合

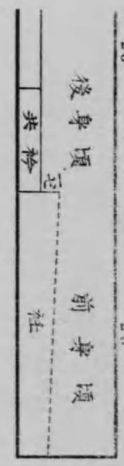
四つ身袷及綿入の身頃の箆を附る時、耳の不揃のものは、袵附の箆をなす時に、後幅及び前幅を度りて、脇縫の箆を附け置くべし。

第九 並幅二丈三尺二寸の布にて裏衿無四つ身の裁ち方

前幅を衿肩明より五分斜に裾口の方を廣くなして、袵幅との釣合を附るべし。

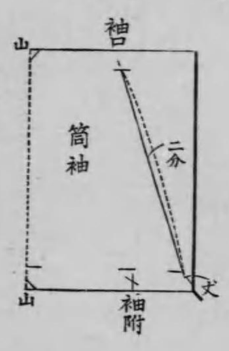
此裁方は、三つ身と普通四つ身との間に用ゆるに適す。





筒袖

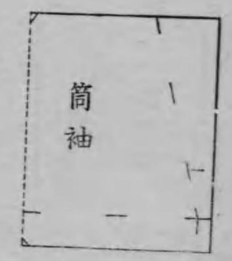
1/10



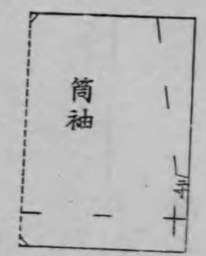
第十 筒袖の縫方及び脇明

筒袖の袖下を圖の如く、中央にて二三分ふくらして縫ふ時は、恰好宜しけれども縫ひにくければ、熟練の後は此仕立方になすを良とす。

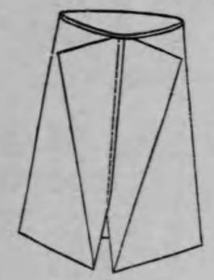
(一)



(二)



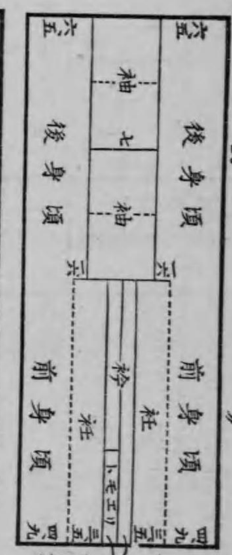
(三)
仕立上りを裏より見たる圖



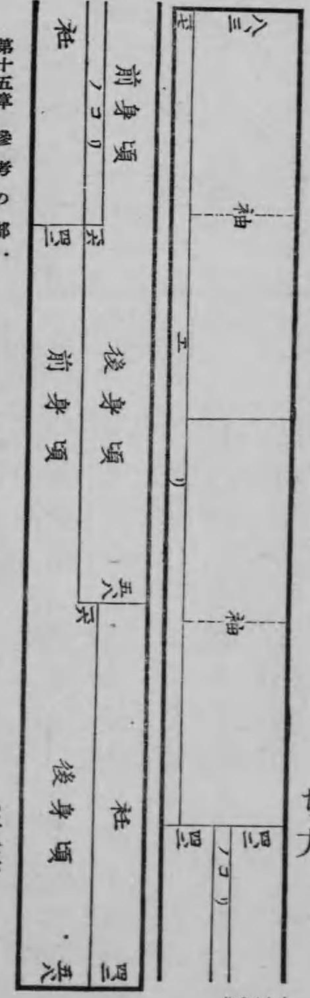
筒袖の脇明を袖下の縫目と身やつ口と續きに明ることあり、其場合には袖丈充分なるものは、第一圖の如く箆附をなし、袖丈短きものは第二圖の如く箆附をなし、袖下を明の箆より袖口まで縫ひ、内袖の方に折を附け、外袖の縫込を第三圖の如く袖口の方にて一分五厘程重ね明の箆の處を一ばいにして斜に割り、其折山の端に小針に出して綴ぢ、單なれば兩方の縫込の端を二分位に折りて袖の表に小さく縫目を出して絎け附るべし。

第十一　大幅物にて三つ身相當の元祿袖撮み衽の裁ち方

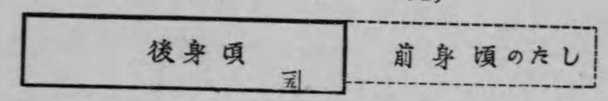
大幅五尺二寸



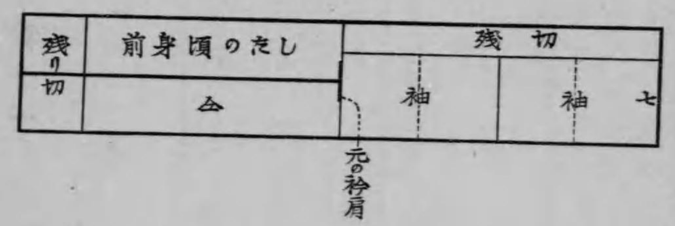
第十二　一尺幅片面物にて三つ身長袖追送りの裁ち方



（袖の元）



（頃身の元）



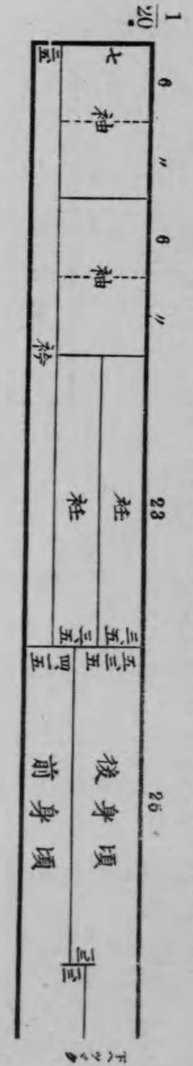
第十三　長袖一つ身を三つ身筒袖に仕立直す場合

長袖の一つ身を筒袖の三つ身に仕立直す、場合には衽及び衿は其儘に用ひ其他は圖の如くなすべし。

此圖は前の接ぎ目を前掛の下に隠す爲め、身丈を少し縮めたれども、少しにても丈の長きを望む時は、前に切を出さず袖を其儘後身頃となし、肩にて接ぎ合すべし。

元の共衿損しをらば袖の脇の切を共衿となすべし。

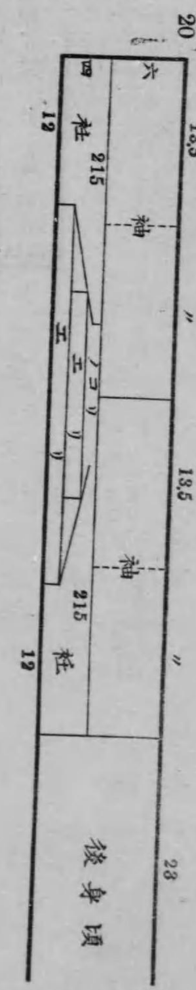
第十四　並幅の兩面物にて二つ身の裁ち方



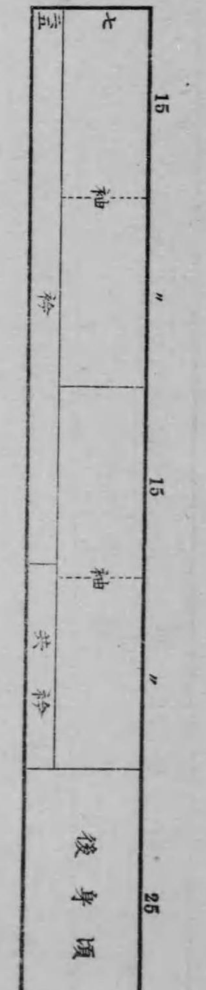
此裁ち方は餘り用ゐざれども、他に應用する場合もあれば、身幅の積り方を左に示す。

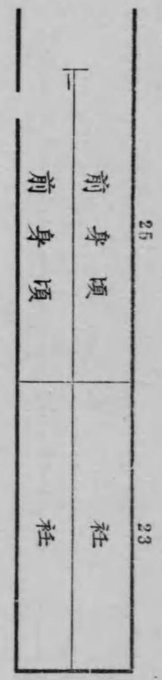
布の半幅に衿肩明の寸法の二分の一を加へたるものを後幅となし、二分の一を引たるものを前幅となす。

第十五　一尺幅の片面物にて一つ身鈎衽の裁ち方



第十六　並幅にて一つ身別衽の裁ち方





第十七　紅木綿一反にて生兒着物二枚胴着一枚襦袢二枚の裁ち合せ方

紅木綿一反（幅九寸三分　長二丈七尺五寸）にて生兒着物二枚胴着一枚襦袢二枚裁ち合せの圖

裁ち切り寸法

一、身丈	一尺八寸五分
一、袖幅	四寸八分
一、袖丈	七寸
一、袵幅	三寸二分
一、袵丈	一尺六寸五分
一、衿幅	一寸三分
一、衿丈	三尺
一、附紐幅	二寸一分
一、附紐丈	二尺五分

後紐を附たる圖

着物

胴着

一、身丈　一尺五寸
一、袖幅　四寸八分
一、袖丈　六寸五分
一、衿幅　二寸四分
一、衿丈　二尺五寸

襦袢

一、身丈　一尺
一、袖幅　四寸六分五厘(半幅)
一、袖丈　六寸
一、衿幅　二寸四分
一、衿丈　二尺五寸

第十八

メリンス大幅(一尺九寸五分)長さ三尺一寸五分にて裾廻しの裁ち方

第十九

メリンス大幅(一尺九寸五分)長さ三尺六寸にて裾廻しの裁ち方

第二十　裾廻しを横幕に用ゆる場合

裾廻しを横幕(横布)に用ゆる時は、出來上り寸法の裾幅を度り、之に各縫目の縫代を加へたるものを、裾廻しの用布となし、縫目を何れも空縫になすべし。

女兒改良服仕立上り圖
(前)

第二十一　女兒改良服

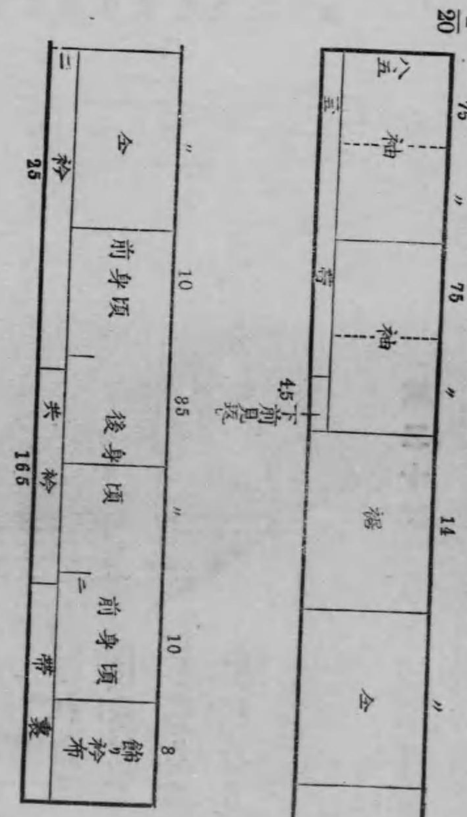
此改良服の飾り衿は下げ髪にて、衣服の肩の

女兒改良服仕立上り圖
(後)

邊に汚れの附かぬ樣に飾りを兼ねて、附たるもの故、釣合よき布なれば、別布にても差支なし、又汚れたる時は共衿と共に、取はづして洗濯をなし得るものなれば、至極便利なり。

第二十二　メリンス半幅にて女兒改良服の裁方積り方及び縫ひ方

メリンス半幅一丈三尺一寸にて女兒改良服の裁ち方

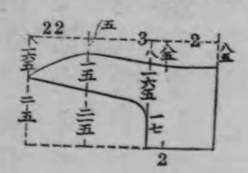


積り方

7.5×4=30　　14×4=56

(10+8,5)×2=37　　30+56+37+8=131

飾り衿の心形を裁つ圖



女兒改良服箆附及び縫方順序

箆附方

一袖　山の箆を附け、丈を袖幅の處にて度り、袖口の方にて、五分短くなして袖口より斜に袖下の箆附をなし、次に袖附の箆を附け、袖幅は山の處にて八分廣くなし、袖附より斜に箆附をなすべし。

一身頃　山、及び袖附身やつ口等の箆附を普通になすべし。

縫方

一袖　左右とも袖下を襄縫になし、袖口に襞を取り、(山を巾着襞になし、それより下向きに)襞にて留め置き、レースを縫ひ附け置くべし。

二身頃　脊を襄縫になし、肩當布を單衣の如くなして綴ぢ附け、

後幅及び肩幅の箆を附け（肩幅は後幅より八分位狹く）左右の脇縫をなし、衽の縫目を附けず、其儘衿肩より斜に衿附をなし、三つ衿に布を綴ぢ附け、衿先を縫はず衿紵をなすべし。

三 袖附　左右共袖山より兩方へ二寸位づゝ、細かく二筋縫ひ、其絲を引しめて山の處を二寸位に縮めて留め置き、袖山と身頃の山とを合せて待針を刺して袖附をなし、振り及び身やつ口を三つ折紵になすべし。

四 肩揚　肩揚を普通になすべし。

五 裾　裾布を各々縫ひ合せ、狹き布を前になる樣になして、一方の上部を三寸位縫ひ殘し、其處に見返を附け、（上前即ち裾布の狹き方には表より縫ひ附け、裏にて紵け附ける、下前は持ち出し）閂留をなし、次に裾掛幅を一寸位になして紵け、上部を小針に二筋縫ひ胴廻りの寸法に縮めて留め置くべし。

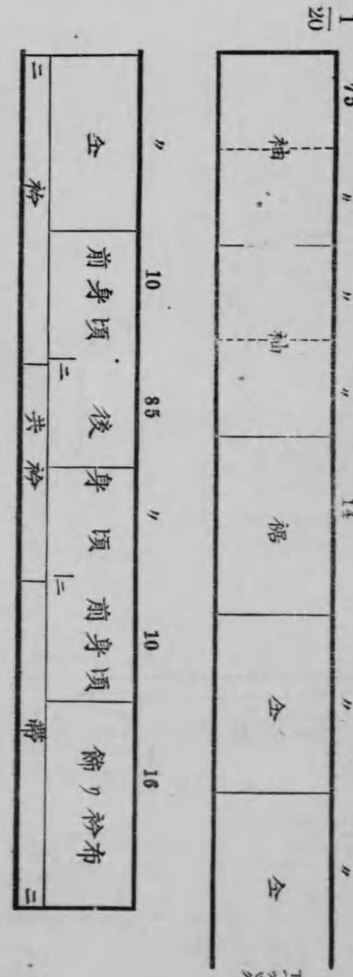
六 帶附　帶布の端を上前に縫代だけ出して、裏表の布にて裾布の上部を挾み、縫縮の片寄らぬ樣になして待針を刺し、半返しにて縫ひ附け、下前は續きに帶布のみ端まで縫ひ置き、先に縫ひ置きたる身頃の丈を定めて帶附の印を附け、（後は眞直、前は腹部の大小に依り七八分位より一寸五分位まで長くなし、脇より斜になす其處にて脊の縫目より一寸二三分離れたる處を三分位撮みて兩脇に襞を取り、脇の縫目より前後とも一寸位離して少しく縫ひ縮め、胴廻りの寸法に相當する樣加減をなし、下前の脇の縫目より一寸位、前に寄りたる處に裾の下前の持出しの縫目の通りを當て待針を刺し、其間は帶丈に合せて縫縮めを引締め、ねぢれぬ樣に待針を刺して帶附をなし、兩方の帶先を縫ひ、帶裏を

紡け附け、次に下前の帶先及び上前の脇縫の裏に細き紐を縫ひ附け、上前の帶先の裏にホックを二つ附け、其表側に飾釦、或はリボンを結びて附け、次に下前の持出しの縫目の通りに門留をなし、裾口より二寸五分位の處に、丈に應じて揚を二本、或は三本位撮み置くべし。

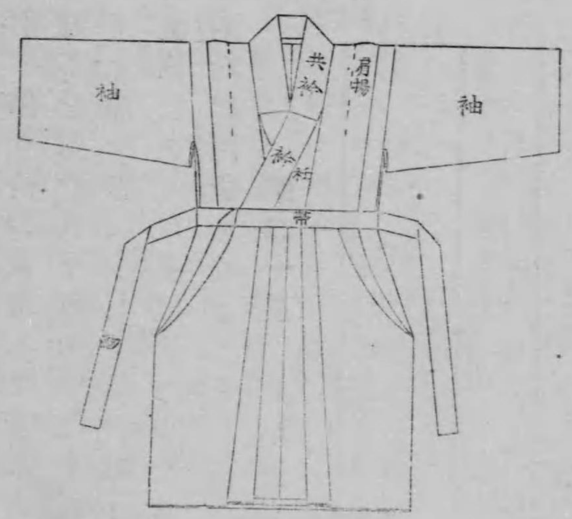
七　飾衿及び共衿　飾衿の芯を形紙通り切り表布の裏側に當て其廻りに躾にて綴ぢ附け、縫代丈出して廻りを裁ち落し、裏布を合せて外廻りを縫ひ合せ、之を表に返し內廻り（衿附の處）を躾にて綴ぢ置き、外廻りの表に飾りテップを當て裏表に目立ね樣に針目を出して綴ぢ附け、次に飾衿の中央を脊縫の衿附の處に當て待針を刺し、飾衿の前の方を衿附に做ひて躾にて綴ぢ置き、其上に共衿を載せて普通に紡け附るべし。

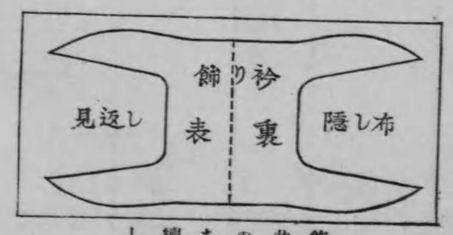
八　隱附　飾り衿の裁落しより取りたる隱布を適宜に切り上部に見返布を附け、其下廻りを二分位折りて下前見返しの縫目の際にて上部を帶に少しく掛け、其下廻りを躾にて裾布に綴ぢ置き、其裏側にテップ、或は細き布を當て表より本返し縫をなし、口明の兩端に門留をなすべし。

第二十三　並幅半反にて女兒改良服の裁ち方



男兒改良服仕立上り の圖
（前）





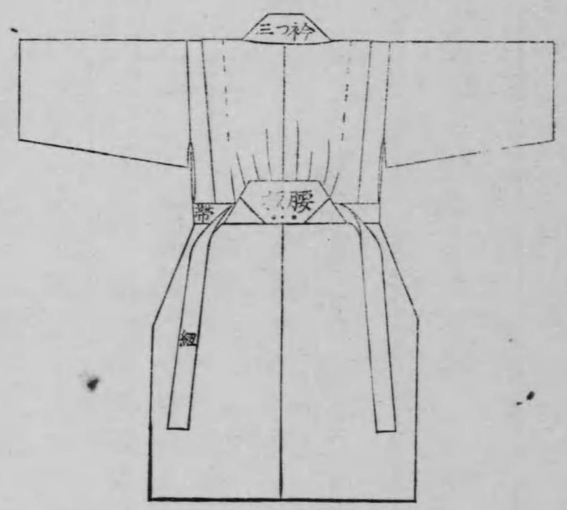
飾り衿の裏表共布の時は圖の如く下部即ち點線の處を續きに裁つべし

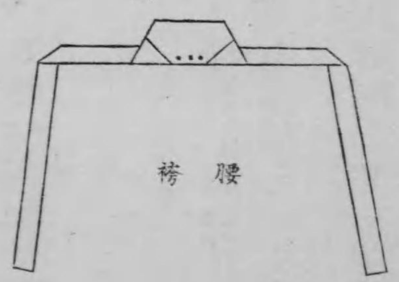
（三〇二）

第二十四　男兒改良服

此改良服を幼稚園及び尋常一二年の兒童に用ゆれば着せ附、手輕にして終日袴のずれる事なく、又汚れたる時には腰板を取りはづして洗濯をなし得べく、尤も實用に適す。

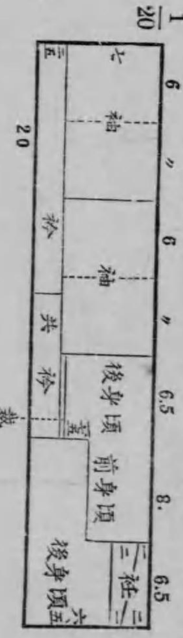
男兒改良服仕立上り の圖
（後）





（三〇三）

第二十五　並幅四尺五寸にて男兒改良服身頃の裁ち方(三つ身裁)



第二十六　並幅にて男兒改良服袴の裁ち方

男兒改良服袴附及び縫方順序

袴附方

一袖　普通單衣の如く一方を二分長くなして山、丈、袖口、袖下、袖附、袖幅等の袴附をなすべし。

一身頃　山、袖附、身八つ口、衽下り等の袴附を普通になすべし。

一衽　衽丈と衽附との袴附をなし、下の幅一寸になして衿附の袴をなすべし(四つ身裁は衽の袴附を要せず。)

縫方

一袖　左右とも普通單衣の如く縫ふべし。

二身頃　脊を囊縫になし、肩當布を單衣の如くなして綴ぢ附け、後幅及び肩幅の袴を附け、左右の脇縫をなし、次に左右の衽附をなし、(四つ身裁は衽附を要せず)表衿に裏衿を縫ひ附け、衿山を脊

縫に當て單衣の如く、待針を刺して衿附をなし、三つ衿に布を入れて綴ぢ附け、衿先を縫はず衿紵をなし共衿を掛るべし。

三 袖附　左右とも普通單衣の如く附けるべし。

四 肩揚　肩揚を普通になすべし。

五 袴　後布を二枚縫合せ、裾口を左に持ち、手前の方に折を附け、次に前布を二枚合せ、短き方を縫ひ合せ、裾口を右に持ち手前の方に折を附け、次に前布の長き方に脇布の短き方を縫ひ合せ、前布の方に折を附け、脇布の兩横(相引)と後布の兩横(相引)とを合せて、左は下より三分の二迄眞直に縫ひ、夫より上は前は眞直後は五分程縫ひ込みて(胴廻りの太きものは眞直)上まで縫ひ合せ、右は三分の二より二寸位上まで縫ひ合せて輪となし、兩方とも脇布の方に折を附け、縫ひ殘したる後布の處に見返し布を表より縫ひ附け、裏にて紵け附け(左にて五分縫込みたる分を持出しの代りになす)羽織袴の卷の男兒襠無袴の如く、後前の襞を取り左右の笹襞を取り、胴廻りの細きものには後の襞を取る時上部を深く折りて加減をなし、胴廻りの寸法に合せて襞を取り帶布の裏表にて袴の上部を挾み、女兒改良服の如くなして半返しにて縫ひ附け置くべし。

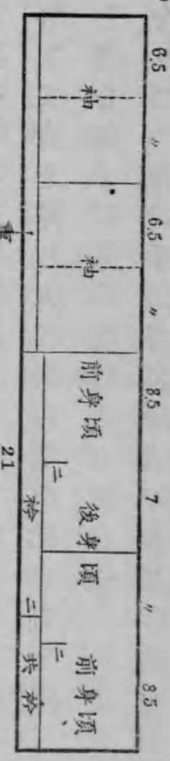
六 帶附　先に縫ひ置きたる身頃の丈を定めて、帶附の標を附け(後は眞直、前は腹部の大小に依り七八分より一寸五分位迄長くなし脇より斜になす)其處にて脊の縫目より一寸二三分はなれたる處を三分位撮みて、兩脇に襞を取り、右の脇の縫目より一寸位前に寄りたる處に、袴の下前見返しの端より七八分位脇の方に寄りたる處を當て待針を刺し、後前の肩揚の折にて、胴廻りの

加減をなし帶丈に合せ、ねぢれぬ樣に待針を刺して帶附をなし、兩方の帶先を縫ひ、帶裏を紮け附け、下前の帶先及左脇縫の裏に細き紐を縫附け、上前の帶先の裏にホックを附け、右脇縫より一寸位前に寄りたる處、即ち見返し布の端より七八分脇の方に寄りたる處の帶布に閂留をなすべし。

七　袴腰　袴腰を本書、羽織、袴の卷に示せる如くなして、作り紐を普通袴の後紐の如く二本紮け、之を袴腰に綴ぢ附け、裏腰を其裏側に當てゝ絲の掛け方は、普通袴腰と同樣になして表腰に綴ぢ附け、裏腰の上廻りを折りて貼り附け、圖の如きものを作り、之を仕立上り圖の如く、後の帶の上に當てゝ中央に三針及紐の附際の處に、一針づつ裏に貫きてしかと綴ぢ附け置くべし。

第二十七　並幅五尺七寸にて男兒改良服身頃の

裁ち方(四つ身裁)



積り方

袖丈
6.5 × 4 = 26

身巾
31 − 1.5 × 2 = 28

總尺
57 − 26 = 31

28 ÷ 4 = 7
後先

袴の裁ち方及び箆附縫方順序等總て三つ身裁の說明を見て多少の加減をなすべし。

第二十八　着物の解き方及び縫直し方

一　單衣を解くには先に裾紮、衿下、衿紮、衿先、袖口、振、袖下等を解

き、洗ひ乾かしたる後、兩袖を解き離し、次に衿、衽、脇縫、肩當及び居敷當、脊縫等を解き離すべし。

一　衿を解くには、先に衿を解き離し、次に衿下を解き、衽を取り去り、袖口、袖下、振身、八つ口等を解き、脇及び脊縫の中綴を解き、裾合を解きて表裏別々になし、洗ひ乾かしたる後、單衣の如き順序に解き離すべし。

一　綿入を解くには、衿、衿下、衽、袖口、振、身八つ口等の紆目を解き、綿を裏身頃の方に附け、表身頃を離しながら布綴を解き、裾合せを解きて表を離し、次に裏身頃を綿の方を中にして下に置き、襦袢を疊む如くに脇の縫目より前身頃を向ふに折り、右の手にて綿をおさへ、左の手にて裏身頃の前及び袖を離し、次に向側の前身頃を手前の方に折り重ね、前と同樣になして裏身頃を離し、兩袖の綿を平になし、左右より折り重ね、次に、裾口より綿を適宜に折りながら後身頃を離し、表裏とも袂の角を解き、洗ひ乾かしたる後、單衣の如き順序に解き離すべし。

何れも叮寧に絲屑を取り去り、傷みたる箇所につぎを當て、表になす方を中にして、一枚づゝ疊み、之を糊に浸し布目を正しく板に張り、其上を柔かき布にて輕くむらなく撫で置き、乾きたる後布目の曲らぬ樣に剝すべし。

注意　身頃の前になす方を張板に折り曲げて張り、又鈎衽の時は、鈎の處を伸さぬ樣にして張るべし。

一　袖　元の袖附を袖口になすべし（奥口）

一　身頃　元の後を前になすべし（脊返し）

一衽　棒衽なれば元の上を下になし（天地）衿下を附の方になすべし。

一衿及び共衿　元の衿紵を附の方になすべし。

綿入の裏は裾廻し布を上下になし、其他は總て表に做ふべし。

一古き綿を其儘用ゆる時は、袖口及び裾の表布が、早く傷み勝なれば、其部分は新らしき綿と取替へるを良とす。

新編裁縫全書（着物の卷）上終

新編裁縫全書上卷
着物之卷
定價金貳圓參拾錢

著作者　遠藤錠子
著作者　高田久子
發行者　大倉保五郎
印刷者　島連太郎
印刷所　神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

大正九年五月一日印刷
大正九年五月五日發行

不許複製

發行所……東京市日本橋區通壹丁目
振替口座東京二三八番　大倉書店

女子高等師範學校助教授　神田順子　著

裁縫新教授書（上卷）

■裁縫の技術は婦人の天職なり

裁縫は家庭に於て最も樞要の技術にして女子たる者の必ず修むべき業であります、服裝の高尚優美なるは仕立方の如何に據るもの多し、本書は綿密な分り安い文章を以て衣類の各分部の名稱地質の選み方等は申す迄もなく補綴法まで精しく説明してある、それに挿畫は何れの實物の縮圖なりて縫目の針數までもこの挿畫の通て實物に適應されますのは大に誇る點であります、初心者の方は勿論高等女學校、女子師範を始め女子教育に關係する各學校の教科書、參考書としてこの上なき良い書です。

■本書は各女學校の良教科書なり

和裝美製紙數二百七十餘頁
定價金壹圓五拾錢　郵税金十二錢

共著
伊藤小川田高
子子子子
立女職業學校教師
文錠久

裁縫おさいく物（附實用小物）

手藝中で最も手輕に複雜な道具を使はず普通裁縫の心得のある方に誰れにでも習得するのはをさいくものであります本書はその製作順序を細説した上石版刷と寫眞版木版などて外形から分解圖までも示し實物大の原型圖を掲げ説明と相助けて懇切に書いてあります本書を手本にして寸假を利用すれば立派な美しい家庭要具が製作されて趣味と實益とを兼ね得られます。

和洋美製全一冊
定價金壹圓八拾錢
郵税金十二錢

裁縫おさいく物（續編）

本書は裁縫おさいくものの續編として生れたもので右目次の大要は小袋、針刺、腕附、手提袋、ペン掛、置物、巾着、玩具、涎掛、子供足袋、香入、珠數入、お鈴臺、雜種等八十三種附錄原型六十六種口繪石版十三度刷二枚、寫眞版十頁を挿入してあります。

和洋美製全一冊
定價金貳圓貳拾錢
郵税金十二錢

共立女子職業學校、東京女子美術學校、實踐女學校教師

伊澤峯子著

改訂實用 小兒洋服裁縫全書

洋裝菊版 全一冊
定價金貳圓參拾錢
郵稅金十二錢

小兒を完全に保育せんとするもの小兒洋服の仕立方を知らざるべからず▲洋服は小兒の性情に適する理想的の服裝なり▲洋服は運動を輕快ならしめて形狀色彩の美を兼ね洗濯に便にして其材料低廉なり▲洋服仕立方の基礎を知らざれば洋服裁縫教授を完全になす能はず▲洋服裁縫の基礎を知るは應用力を增進するの基なり▲本書は洋服裁縫の基礎を悉く圖解を附し詳說して洋服裁縫の奧義を容易に知らしむる也

小兒實用 和洋裁縫小物集

洋裝菊版 全一冊
定價金壹圓五拾錢
郵稅金八錢

子供の着けたる如何に些の裝飾も兒童をしてその心理に非常なる善惡の影響を與ふることは識者の夙に認むるところなり。本書は一般家庭の主婦にして心得べき經濟的且つ趣味的なる兒童の和洋小物を豐富なる挿圖を以て全三十五章に亙り詳述せるものなれば主婦令孃の必讀すべき良書たるを疑はず。

—(大倉書店發行)—

家政並に手藝書目

弊店の出版物は其內容は勿論紙質、印刷、製本、裝幀に至る迄最善を盡せり故に我が國の出版界に於ける信用と聲望とは既に定評あり之れ特に弊店の誇とする所なり。

東京女學館教師 國分操子著 ●家庭日用 **婦女寶鑑** 一名嫁入道具
洋裝菊判布製 裝幀優美 箱入 全壹冊 正價金六圓 郵稅金貳拾四錢
●敎育界に令名ある著者が吾が國家庭及一般婦人の座右の寶典として其蘊蓄を傾け、國體、皇室、敎育、禮式、家政、育兒、讀書、作文、書畫、作歌、音樂、茶香、生花、手藝其他必須智識一切を網羅す

大倉書店編 ●**實用家計簿**
洋裝四六判 製本堅牢 全壹冊 正價金六拾五錢 郵稅金四錢
●本書は最も實用向きを主とし簡易に且つ新式なる考案の下に組織されたれば何れの家庭に於ても使用して至便也、收支計算、仕譯、豫算對照、財產目錄其他必須要項を收む、用紙最上質赤罫引製本堅牢

巖谷小波著 ●新家庭 **女、子供の巻**
洋裝四六判 函入美製 全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢
●女の巻子供の巻の二編より成り前者は新家庭を造らんとする女子に與ふる著者の觀察私見で後者は子供についての私見である共に家庭の人々が讀んで必ず益と興味を感ぜらるゝこと疑ひなし

不二舍直正著 ●**作歌講義**
洋裝四六判 美裝 全壹冊 正價金壹圓六拾錢 郵稅金八錢
●本書は初心者の手引、老熟者の寶典也、我國古來より發達し來れる和歌の眞髓は勿論作歌の要項は搔い處へ手の屆く樣に說いてある、外に詠進の樣式及び其他の歌式もある令孃女學生の作歌上座右すべき要本也

石田傳吉著 ●新編 **理想の家庭**
洋裝菊判布裝 箱入 全壹冊 正價金壹圓五拾錢 郵稅金八錢
●本書の理想と云ふは遠い空想的のものを云ふに非ず現在より一步を進めて實行し吾人が身分相應に營み得る理想の家庭について著者の沈痛なる經驗より詳論したる警醒的著述である

寺崎廣業畫伯 坂正臣先生和歌 ●**我子の生立**
奉書着色木板摺、套入裝幀優美、全壹冊 正價金五圓五拾錢 郵稅金拾八錢
●本書は廣業畫伯畫、坂先生育兒上の撰歌、三島醫學博士育兒上の注意、小笠氏儀式祝事の注意の合作に成る我愛兒の生立を記錄すべき育兒帖なれば後日の好紀念なり、家庭の出產祝ひの遺物には高尚の思付品也

醫學博士 吾妻勝剛著 ●**お產の心得**
洋裝菊判 布製 全壹冊 正價金壹圓七拾錢 郵稅金拾貳錢
●本書は婦人科の大家たる著者が最も通俗詳細に說かれたる產婦心讀の書也、姙娠より受くる健康狀態、姙婦の日常生活、姙婦の精神感動、姙婦の生理、分娩の生理の各章數十項に亙り詳說せり

藥學士 越澤渦滿著 ●家庭日用 **衛生醫典**
洋裝菊判 布製函入 全壹冊 正價金二圓 郵稅金拾八錢
●本書は簡明に且要領を摘出し家庭日常必須の衛生事項を網羅す、衣服、沐浴、看護法、育兒、食養法、轉地療法、ラヂウム、飲料水試驗法、食品保存法、化粧品の製法、家庭必要藥品等其他多種々有り

女子高等師範學校助教授並に高等女學校講師 神田順子著 ●**裁縫新敎授書** 上卷
和裝菊判 美製 全壹冊 正價金壹圓三拾錢 郵稅金拾貳錢
●斯界に令名あり且つ文部省檢定委員たる著者が、女子師範、高等女學校、技藝學校等の敎科用並に參考用等に充つる目的にて編纂せる書也、內容は總論、單衣、袷、長襦袢、袷長襦袢、綿入、長衣、補綴法等

前共立女子職業學校教師 遠藤錠子・高田久子 共著
● 新編裁縫全書 上（着物之巻）
和製菊判美製 上巻壹冊 正價金貳圓五拾錢 郵稅金十二錢

同
● 新編裁縫全書 中（羽綾袴の巻）
和裝菊判美製 中巻壹冊 近刊

同
● 新編裁縫全書 下（重物の巻）
和裝菊判美製 下巻壹冊 近刊

●今や生活改善の聲と共に服裝の改善又高唱せらる、此の秋に當りて家庭の主婦たるものは皆――一樣に裁縫に關する知識と技に熟達し時代の推移に應じて家政整理の一助とせざる可からず、從來出版されし裁縫書中には良書もあれども益々多繁にして學ぶに多き歳月を許さざる新時代に適するの書に漸く乏し、茲に於て多年敎授上の經驗と裁縫の技に秀でたる著者は此の缺を補はんが爲めに渾身の努力を惜まず以て本書を著さる、其の説く遠長く初心者の心理を解し最も平易且つ透明に而かも多數の圖解は最新[illegible]の圖解法に依り理解を簡便ならしめたり、敎授者の好參考として推奬すると共に女學生、一般婦女子の座右に一本を備へられんことをすゝむ

共立女子職業學校教師 伊藤文子・小川錠子・高田久子 共著
● 裁縫おさいく物 附實用小物
和裝菊判美製 全壹冊 正價金壹圓八拾錢 郵稅金拾錢

同
● 續裁縫おさいく物
和裝菊判美製 全壹冊 正價金貳圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢

●別に面倒な道具を用ゐずに裁縫の心得ある者は容易に出來るお細工物で其製作方法は實物大の原形圖を、幾多の補圖と相俟て懇切に説いてある、教員 女學生、家庭の人々に實益と趣味とを與ふる書である 兩書の卷頭には原色石版、寫眞圖全部を揭く、正編は小袋、針差、物入、上げ、巾着、手提袋等七十三、續編は小袋、針刺、駄突、ペン拭、玩具、遊掛等八十三

共立女子職業學校教師 木村淡香 著
● 和洋裁縫小きれ細工
和裝菊判美製 口繪着色圖及寫眞版圖多數入 全壹冊 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾錢
●家庭、教員、生徒諸彥の爲めに小切類を利用しての美術製作品に付き圖を插入して平易に敍示せり、内容は材料、製作要項より小袋、小物入、遊掛、帽子、足袋カバー、製作手柄、背守、[illegible]縫以下八十五點

共立女子職業學校教師 遠藤錠子・高田久子 共著
● 續次裁縫おさいく物 おもちや集
和裝菊判美製 口繪仕上品原色圖全部入 全壹冊 正價金壹圓七拾錢 郵稅金拾錢
●本書は裁ち餘りの小切で家庭實用の美事なおもちやが出來ます、説明は懇切であるから何人にも習得容易です、製作要項、手毬、お手玉、から〳〵、人形、動物、車及航空機等三十七種有り

共立女子職業學校教師 木村淡香 著
● 新案裁縫小物全書
和製菊判美製 口繪着色圖及寫眞版圖仕上圖入 全壹冊 正價金貳圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢
●不用の小切類で巧妙な美術的實用品が出來る樣に々原型圖と插圖とで解り易く說く、針差、巾着、小袋、賦突、遊掛、手提袋、緣かゞり法、●絽刺法、ネクタイ、帽子、裁縫玩具其他種々あり

共立女子職業學校女子美術學校教師 伊澤峯子 著
● 改訂實用 小兒洋服裁縫全書
洋製菊判 布全壹冊 正價金貳圓參拾錢 郵稅金拾貳錢
●著者曾て歐米に學び歸朝後各女學校に於て敎授すること多年其實驗に基き一般の人々に最も理解容易ならしむる樣女兒及男兒服の一切其他前掛帽子等に至る迄其縫方及必要事項を解說せり

同
● 小兒實用 和洋裁縫小物集
洋裝菊判 布全壹冊 正價金壹圓五拾錢 郵稅金六錢
●小兒の身心發達上衛生上益大なる端正の姿態を保たしむる爲めに必要なる種々の小物裁縫を各家庭の主婦令孃に容易に習得出來る樣解說したる書である、帽子、前掛、男女兒服、運動服以下各種

中村興湖・村井秋翠 共著
● 家庭 袋物細工全書
和製菊判美製 口繪製作品寫眞版圖押入 全壹冊 正價金貳圓 郵稅金拾貳錢
●袋物一切の製作法並に心要なる要項は悉く述べ圖解と共に說明懇切獨習容易也原型圖あり直に形紙を造り得らるゝ寸法も附してある故自ら製圖して形を切ることも出來る、家庭及學生の好師友也

共立女子職業學校教師 山田きよ子・稗村なか子
● 袋物細工の技折
和裝菊判美製 口繪製作品全部寫眞版圖押入 全壹冊 正價金貳圓 郵稅金拾貳錢
●書中二編に別ち獨習者の爲めに順を追ふて懇切に說明す插圖及原型圖を添ふ上編は必要なる要項を述べ下編は製作法二十二章に亘り說けり家庭及學生諸孃の獨習並に檢定受驗の好侶伴也

村井秋翠・木村俊臣 共著
● 和洋袋物細工
和裝菊判美製 全壹冊 近刊
●世に袋物の著書尠からざれども小學校等の展覽會及バザー用の者なし、本書は此の方面の敎授者參考及一生徒の獨習用として特に新材料を蒐集して編纂す、第一章總說五節、第二章實物製作法廿八節實物大型紙附

撮み細工專門 吉岡女塾長 吉岡房次郎 著
● 女子技藝 撮み細工全書
實物大形紙付 和裝菊判美製 全壹冊 正價金壹圓七拾錢 郵稅金拾錢
●吾國撮み細工普及に最大功勞者たる著者は曾に學校に於て敎授するを以て滿足せず是れを書に上梓して益々普及を全ふせんが爲めに著せる苦心の書なれば其說明獨習者に遺憾なからしむ

津田敏子 著
● ろざし圖案集 附說明
色刷臺紙張製 菊倍判帙入 全壹冊 正價金貳圓八拾錢 郵稅金拾八錢
●著者は閨秀美術畫家にして又熱心なる手藝研究の才媛なり本書は多年研究せる應用最も實き精巧品を選び袋物より帶模樣に至る迄三十餘の新意匠を原色にて現せり外にろざし法を說ける冊子を添へたり

共立女子職業學校教師 岡本翠次郎・木村淡香 共著
● 實用刺繍全書
和裝菊判美製 口繪三色版 寫眞版及挿入 全壹冊 正價金貳圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢
●刺繍は衣服其他裝飾品として家庭經濟上、職業上下一般婦人間に大流行を極め、殷ふて學ばんとせりし滿足なる獨習書なきを憾む、獨り本書は圖解と說明とにて徹底的に詳述す、讀者よ本書の眞價を疑ふ勿れ

共立女子職業學校教師 木村淡香 著
● 刺繍圖按集 第一 附配色法
菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金四錢

同
● 刺繍圖按集 第二 附刺繍術
菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金四錢

同
● 刺繍圖按集 第三 附應用法說明
菊判倍横綴 色摺口繪入 紙數三十五葉 全壹冊 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金四錢

●本書は薄き透明紙に印刷しあれば裏から白粉にて印せば直ちに用布に寫し取れ且つ圖樣の右向左向自由に變更し得る便有り一般刺繍家並に各女學校の刺繍教科書として學生諸姉が所持すれば一齋に下圖の供給が出來時間の節約と寫損の憂ひなく、成績の進捗數倍に至るべし各冊とも其應用品目は小形額面、半襟、袱紗、袱模樣、手提袋、帶、紙入、ネクタイ、蝙蝠傘、替袖、クツシヨン、其他一切の小形工藝圖按に涉り各卷共一千以上の圖按數を網羅せり各特徴を有すれば何れを使用するも圖按の種類に欠くる事無し繡細工、切嵌細工、敍染圖按、圖畫、挿繪、バランレース等に適用し得

女子高等師範學校講師 森本義子 著
● 家庭編物全書
和裝菊判美製 全壹冊 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾錢
●編物製作上の必要事項から實用向きの手袋、靴下、襟衣、巾着、頭巾、衿卷、手提袋、等其他各種の編方を敍へ保存、洗濯、廢絲利用方に及ぶ全五十章各節に亘り挿圖と相俟て說明懇切なり

共立女子職業學校教師 木村淡香 著
● 編物圖按集 天之巻
四六判横綴 石版刷 全壹冊 正價金圓參參拾錢 郵稅金四錢

同
● 編物圖按集 地之巻
四六判横綴 石版刷 全壹冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金四錢

●圖畫家とし且つ圖按家として令名ある著者が女子技藝にも造詣深く自ら適切なる手引を與へんが爲めに考按せる圖按なり、正確なる縱横の罫劃線中に其圖樣を當嵌めあれば目數に從ひて行けば容易に共圖樣の如く製作し得べきのみならず原圖より擴大又は縮少を望む場合は糸の細太と目數增減とに依りて之を自由になし得べし、天地人の三卷に別ち各卷頭に詳細なる說明を加へ各三十葉の鮮明なる原色刷圖按と圖按應用紙五葉を

共立女子職業學校教師 木村淡香著
●編物圖按集 人之卷
四六判橫綴 石版刷 全壹冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金四錢
揃へたり。普通編物の外カンバス探繡、袋物、組紐、南京玉嵌附毛出結、玉出結等に應用し得べし

前東京美術學校教授 文學博士 小杉榲邨校閲 齋藤圓子編
●女子教科 包結之栞
和裝 美製 全二冊 正價金貳圓 郵稅金拾錢
●本書は吾國古來より發達し來れる儀式其他に用ゆる包物、折物、水引及結の結び方等を悉く蒐輯して一々圖解を以て示したれば何人も一見直に會得すべし一般家庭に一本を藏して重寶也

寺西綠子著
●女子手藝 九重編造花法 前編・後編
和裝菊判 美製 全二冊 各正價金壹圓廿錢 郵稅各金拾錢
●本書は著者の新工風に係り從來の編物を應用して造花とする獨特の技也本邦廿五種の花卉其形態葉、花瓣蕚蕊の微に至るまで其眞を作品に著せり外に染色標本及組立圖譜を挿入せり

共立女子職業學校教師 金子支江子 三好幸子 石川壽美子 共著
●家庭 造花術全書 上・下
和裝菊判 美製 全二冊 各正價金壹圓八拾錢 郵稅各金拾貳錢
●著者教授上及實驗上より學生及家庭に於て獨習に適する樣豐富なる說明圖を挿入して懇切に說けり上卷春夏三十七種下卷秋三十八種に付き精巧なる各原色刷石版挿入して懇切に解說せり

共立女子職業學校教師 木村淡香著
●花卉圖畫帖 第一卷・第二卷・第三卷
四六倍判 橫綴 全三冊 正價各金七拾錢 郵稅各金四錢
●本書は描畫法上最も必要なる毛筆畫鉛筆畫用模樣を示し且つ凹凸遠近濃淡調和したる着色優美の花卉圖畫帖にして一切の圖畫の要素を習得するに足るものなれども主として造花科の習畫帖に最適なり

野村文擧畫
●應用 手工圖案 松の卷・竹の卷・梅の卷
四六判形 袋入各卷 四十餘圖入 各卷正價金八拾錢 郵稅各金四錢
●本圖案は小學、中學、女學校、又は家庭等の爲めに美術工藝上の知識を與へ且つ意匠を練習せしむる目的にて編纂せるものにして石版着色摺意匠圖案百廿二圖を示し是れに練習模樣畫用紙を添ふ

女子手藝普及會編
●新手藝研究
洋裝菊判 全三冊 正價各金參拾錢 郵稅各金四錢
●女子手藝の發達普及の爲め朝野著名の專門諸先生の執筆の下に發行せる研究錄なり內容は掛額、模樣探繡法、學校服、肱突、手提袋、帽子、以下各種意匠考按、歐米流行紹介、鐵門、附錄等

東京女子高等師範學校講師 高橋岩次郎校訂 女子美術學校講師 富田輝夫著
●家庭實用 染色工藝
洋裝菊判 布製 全壹冊 正價金貳圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢
●內容は總論、纖維、水、藥品、精練、漂白、脫色、無地染、色揚、目引、染替、絞り染、引染、防染、糊拔染、摺染、簡易捺染、染料配合法、洗濯、汚點拔、仕上等で家庭の人々が一讀實行容易の書也

女子美術學校講師 富田輝夫著
●絞り染圖按集 第一 附說明書
實物大圖按 廿六葉入口繪 現色刷四葉入 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾貳錢

同
●絞り染圖按集 第二 附說明書
實物大圖按 廿六葉入口繪 現色刷四葉入 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾貳錢

同
●絞り染圖按集 第三 附說明書
實物大圖案 廿六葉入口繪 現色刷四葉入 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾貳錢

●染色圖按中絞り染圖按は少しく樣式を異にせるものにして其の適否は加工上に難易を及ぼすは勿論複雜なる下繪と雖も屢々不結果を來す事なき能はず、故に其の構圖は色彩と共に最も大切なるものなり、本集は即ち著者が實際に用ひたる各種の圖按を一般家庭、女學校、染色業者の實用に供せんが爲め實工藝上の必要條件を缺かさぬ樣適當なる訂正を施し、色彩等の大要を別に用途上の分類、加工法、染色工藝的に懇切なる說明書を附し、一、二、三と卷を追ふて蒐集したれども何れの卷を用ゆるも差支なし、尚初心者のみならず自在の技に達せざる人は別冊「染色工藝」を一讀せば習得容易なる圖按の應用自在なり

—(大倉書店發行)—

慰日庵 中澤十夢著
●茶道講義
和裝菊判 美製 全壹冊 正價金壹圓八拾錢 郵稅金拾錢
●本書は初學の人にも解し易きを旨として茶道の由來必要なる事項、茶の湯手前仕樣は初習より五種の傳授事及懷石賓主心得七事式に至る迄圖解を挿入して詳說せり外に茶の湯問答八十ケ條を附せり

古流松應齋家元星松齋 中澤理水著
●古流生花講義
和裝半紙本 美製 全貳冊 正價金貳圓參拾錢 郵稅金拾貳錢
●本書は講義と圖譜の二冊本にて前者は生花の歷史及び生花の心得一切、各種草花の生方並に容易に發表せざりし奧儀に至る迄圖を挿入して百六十餘頁に亙り平易に述ぶ、後者は八十餘の鮮明なる花生圖譜也

清芳流 鈴木霞外著
●投入花盛花圖譜
洋裝四六倍判橫綴 全壹冊 正價金壹圓五拾錢 郵稅金拾貳錢
●本書は現今上流家庭に流行しつゝある投入盛花の圖譜百二十圖を鮮明なる寫眞石版刷とせるものにて各圖には花型、花卉草木の取合、枝の配合、花器と花卉の取合、挿し方其他必要事項を說明せり

東京府立第一高等女學校教諭 國澤きよ子著 東京女子高等師範學校教授 近藤耕藏校閲
●家庭に於ける燃料の節約
洋裝菊判 布製 全壹冊 正價金貳圓七拾錢 郵稅金拾貳錢
●本書は理科知識を活用して家庭に於ける燃料の節約上其使用上の新知識を敎へたるもので最も明快に說述してある。燃料暴騰の折柄家庭經濟の福音たるのみならず一般主婦の良き研究書也又家事敎授の好資料なり

日本女子大學校教授 井上秀子女史著
●滋養と經濟の新料理
全壹冊 近刊
●生活改善並に物價暴騰對應策上吾人保健上從來の料理法に甘んずるを許さず、本書は日本女子大學校家政科は井上女史指導の下に國民保健と經濟とを基礎とし深く研究せられし結果に成れる數多の新料理法なり

石井泰次郎著
●日本料理法大全
菊判 全壹冊 近刊
●本書は我料理界に未だ曾て企てなき大寶典として編纂中也、本書一度世に出てんか風靡を以て衆とせらる、人々の最良參考書たるは勿論實に我が料理界の權威書たるを疑はず、敢て湖江の期待を乞ふ

赤堀峯吉 赤堀菊子 赤堀道子 共著
●家庭 日本料理法
洋本三六判 布製美裝箱入 全壹冊 正價金貳圓 郵稅金拾錢
●斯界に令名ある著者が各種合せて六百に亙り豐富なる圖解と共に一見直に調理法を會得し得る樣詳述せり外に四季獻立、注意醤油及酢の調製法、部類分け及びいろは索引を附す、家庭及び割烹生の座右の寶典也

同
●家庭 日用料理 上・下
和裝菊判 美製 全貳冊 各正價金壹圓參拾錢 郵稅各金拾錢
●本書は二十六種の獻立料理法を著者多年敎授しつゝ實驗せるを基として著したれば分量等は正確にて圖をも挿入し懇切に說きたり附錄に和洋菓子料理有り、五十音索引も附したり

赤堀峯翁 赤堀峯吉 赤堀菊子 共著
●家庭 十二ケ月料理法 上・下
和裝菊判 美製 全貳冊 各正價金壹圓參拾錢 郵稅各金拾錢
●斯界の大家たる著者が普通一般の料理法は勿論儀式料理、會席料理、樣式的獻立、節句料理に至る迄各四季十二ケ月に分ち家庭に實地試み得る樣詳說し加之に心得べき重要事項を數多說明せり

興兵衛すし主人
●家庭 壽しのつけ方
洋本菊判 和裝 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金十二錢
●一般素人方の御馳走には五目や海苔卷が多いのは外の製法は手數が掛ると思はれるからです本書は材料さへあれば有り合せの道具で色々の製法を極く手輕に出來る樣親切平易に敎へたものです

宇野彌太郎著
●和洋 卵料理
洋本和製 菊判 全壹冊 正價金壹圓 郵稅金八錢
●著者は西洋料理界の大家なり、本書は即ち著者が歐米に於ける鷄卵の料理法を吾國に紹介せるものにて二百十餘種を選み之れに詳細なる說明を加へたるものなり又卷末には日本料理法に就ても述べたり

11
344

—(大倉書店發行)—

亀井まき子著 ◉臺所の設計 及簡易日本料理 和裝菊判 正價金九拾錢
●臺所の設計の巧拙は家庭の便不便を來す事大なるのみならず時間の經濟にも大なる影響あり此書は多年の技術よりも經驗ある著者の考案による方可なり著者は多年の經驗及等の設計法を說述し併て簡易日本料理を說述せり 全壹冊郵稅金拾錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉共著 ◉日本料理教科書 上・中・下 洋裝菊判 正價金壹圓四拾錢
●未曾嘗て料理教授法の區區たるの大缺點を慨し卒先教授上の範を示さん爲め一定の模範準繩を定め自らあらしめ若ふものをして一目瞭然たらしむる標準たるは本教科書なり 全三冊郵稅金拾八錢

石井泰次郎著 ◉野菜料理 洋裝三六判 正價金七拾錢
●本書は日常の野菜料理（百三十種）を根菜、葉菜、果瓜、花菌、蔬菜、豆菜、球菜に分ち調理を加へて說明し最も手輕に出來る樣に敍へたものである、いろは索引も附してあり家庭の人に至極實用なり 全壹冊郵稅金四錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉共著 ◉即席惣菜料理 洋裝三六判 正價金七拾錢
●本書は最も家庭に必要なる日用惣菜の調理法で愚丁の持方及味ひ味の加減を識らぬ人々の好手引である料は何處の土地でも買求めらるゝ物を以て記述してあるから實習者には便利である 全壹冊郵稅金四錢

奥村繁次郎著 ◉野菜果物魚介諸國漬物法 洋裝菊判布製 正價金壹圓七拾錢
●本書は日常缺く可からざる香の物、酒家の珍重する漬菜、果物、魚介等の全國特長の漬方二百數十種を網羅し最も宜り詳說したるものなれば飯樂骨董の輩なく家庭の厨房に一本備ふべき良書也 全壹冊郵稅金拾錢

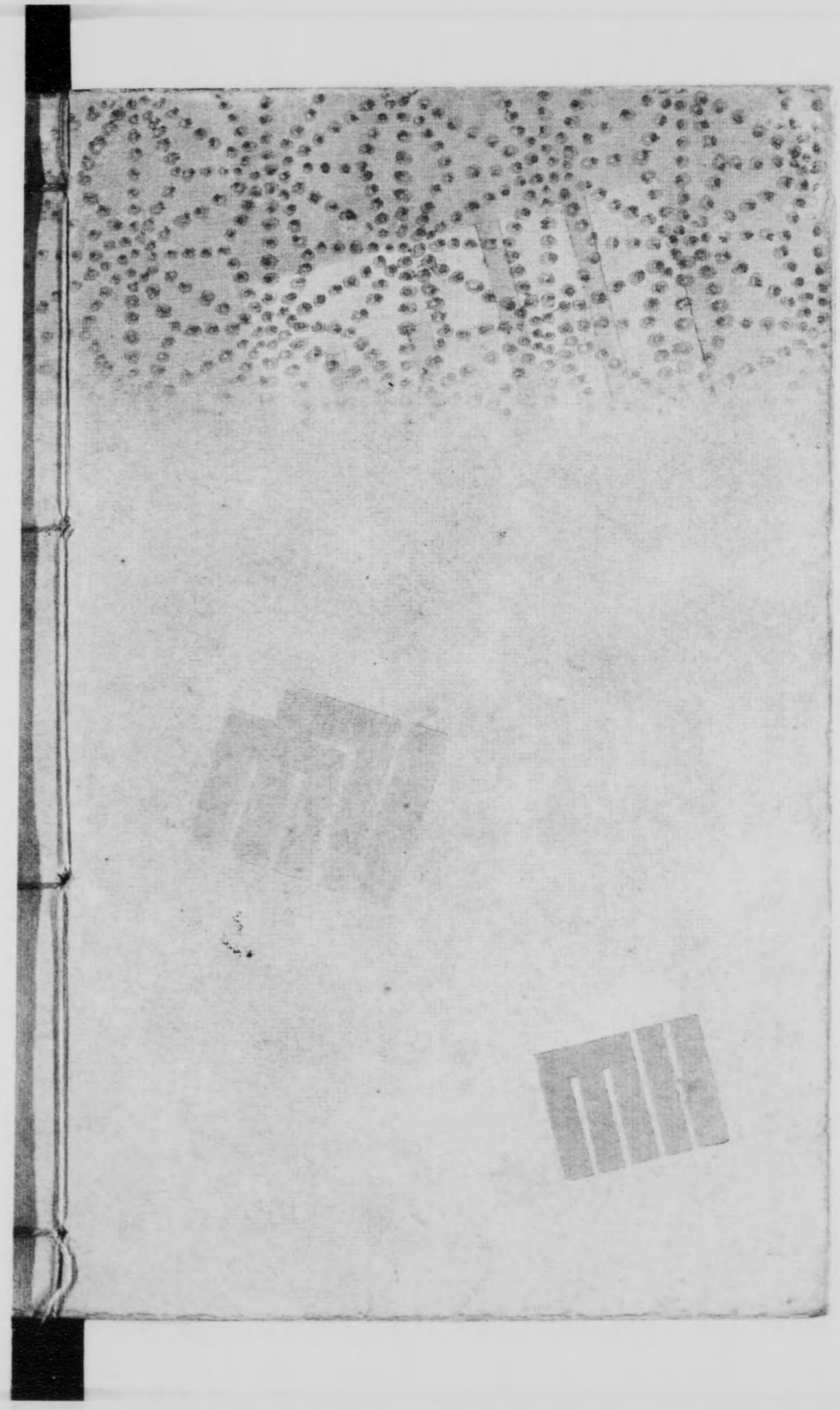
宇野彌太郎著 ◉西洋料理法大全 洋裝菊判布製 正價金四圓貳拾錢
●著者四十四年間の研鑽並に歐米各地に到り其特色を研究し我國の西洋料理に從事する人々の爲に最新料理款立壹千餘種及必要なる要項を網羅收集し圖解を加へて詳細に敍したる料理界の大寶典也 箱入全壹冊郵稅金貳拾四錢

日本女子大學淺岡師 赤堀峯吉著 ◉家庭實用西洋料理法 洋本三六判布製美裝 正價金貳圓 箱入全壹冊郵稅金拾錢
●日本料理界に名ある著者者會て歐米に遊び研究し歸朝後各女學校に教授すること多年嘗て日本料理法を著し又西洋料理法に幾百種の調理法を著述せり切に說述せらる新著也女學生、家庭の朝夕實典也

宇野彌太郎 渡邊諫吉共著 ◉家庭西洋料理 洋裝菊判布製 正價金貳圓 郵稅金拾錢
●著者は歐米各國の料理に通ぜる大家なり我が國家庭に適する樣其味好及趣味と實益を按排し三百三十餘項を錄して最も平易に說明し夫人令孃方の厨房の參考と せり發行以來版を重ること多大也

大森阿仁子 川島芳子共著 ◉西洋料理 附作法と心得 洋裝菊判布製 正價金壹圓 郵稅金拾貳錢
●本書は京の準備、食事の作法、食物、臺所、食器の種類、食物の供方、場合に應じた作法、客の待遇、振舞、食事及社交の作法、付き詳細に述べてある 全壹冊郵稅金拾錢

未苔庵 梅田嬌菓著 ◉家庭和洋菓子製法 洋裝三六判布製 正價金壹圓七拾錢
●祖光以來の菓子業家に生れ研究其益に熱心なる著者が家庭の公に實驗的の新菓製法百五十種を平易に述べ果實應用菓、燒菓子、蒸菓子、揚物菓子、生砂糖菓に分類す 全壹冊郵稅金拾錢

同 ◉實驗和洋菓子製造法 洋裝三六判布製 正價金壹圓七拾錢
●菓子業として將又新道研究に苦心すること多年衆の上確乎不動の和洋菓子製造法を集めて菓子界眞正の秘密を公にせるものなれば新道菓者の明星也又一般の好き手引 全壹冊郵稅金拾錢

終